
偶然という名の奇跡10～文化祭の七不思議～

城ノ内 ジョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偶然という名の奇跡10〜文化祭の七不思議〜

【Nコード】

N8793S

【作者名】

城ノ内 ジョウ

【あらすじ】

いくつかの問題を解決して、意気揚々と文化祭に臨んだTCCのメンバー。一日目は恙なく終了したのだが、事件は二日目に起こった。それは文化祭の最中しか通用しない魔法の言葉『文化祭の七不思議』から始まる複雑怪奇な事件だった。

プロローグ（前書き）

この作品は「偶然という名の奇跡」というシリーズの続編です。全作を見なくとも楽しむことは出来ると思いますが、より楽しんでいただくために、前作からどうぞ。

ブローグ

その日は文化祭当日だった。普段なら授業中で閑散としている中庭も、今はいつになく賑わっている。活気があると言えるだろう。ごった返す人ごみ。みんな例外なく楽しそうだが、一番楽しいのは主催者であるうちの高校の生徒。もっと言えば、文化祭の中心であるうちの学年、すなわち二年生が一番楽しんでいるに決まっている。これは壮大な自己満足なのだ。みんなで力を合わせて完成させた。力を合わせて作り上げた。そんな空気を感ずることができるのは、当人たちだけだ。周りはせいぜい、きつと相当努力したに違いない、と想像するだけである。

とまあ、ここまで偏見丸出しで、偏屈な考えを持つ生徒はそうそういない。俺も自覚している。なぜここまでねじまがった考えを持っているかというと、一つは俺の性格が無残にも捻じ曲がっているから。二つ目は、こういうわいわいがやがやした空気が嫌いだから。そして三つ目は、厄介ごとに巻き込まれているから。

前日まで、他人の悩みに振り回され、他人が持ってきた厄介ごとに奔走していた俺だったが、結局というかやはりというか、当日も厄介ごとに巻き込まれていた。

さてどこから話そうか。やはり最初から話すのが妥当だろう。事が起こったのは、ステージ運営を任された一日目ではなく、特に予定もない二日目のことだった。

プロローグ（後書き）

最初だけ3話あげてみました。

今後は週一ペースでアップしていくつもりです。

またよろしくお願いいたします。

8:30~9:00

十月二十日日曜日。その日は通常通り、八時半に登校した。文化祭一日目である昨日はTCCがステージ運営を任されていたため、何と七時ちょうどに登校することになったが、昨日のステージ運営は無事つつがなく終了したので、今日は一日特別やることもなくのんびり過ごすことができる。俺は安堵感に包まれながらあくびをした。

俺は適当にイスをピックアップすると、そこに腰かけた。なぜ自分の席に着かないのかというと、この教室は展示会場になっているため、自分の席という概念が取っ払われてしまっているのだ。俺以外の人間は、イスに座らず、適当に突っ立って世間話に興じている。机がなくなっただけでずいぶん広く感じるな、などと考えていると、

「成瀬さん、朝から眠そうですね」

話しかけてきたのは言わずもがな、岩崎だった。

「最近気苦労が絶えなかったからな、今日ぐらい怠けたっていいだろう」

こいつのことだ、やれ、やる気がないだの、やれ、高校生としての自覚が足りないだの、言われると思ったのだが、

「そうですね。今日ぐらいのんびりできるといいですね」

これは意外だったね。ま、それほど俺の稼働が高いということだろう。自他ともに認めるところか。

「今日はやけに優しいじゃないか。何かいいことでもあったのか？」
「な、それはどういう意味ですか？まるで私が、いつもは優しくないみたいじゃないですか！」

「そうは言わないが、いつもだったら百パーセント小言が返ってきたはずだ」

「そ、そんなことはありませんよ。私は必要なことしか言いません」

それが小言だと言っているんだよ。しかしまあ小言を言わないでもらえるのはありがたい。気が滅入っているときに、細かいことに關している言われるのは正直気分を害する。決して短気ではない俺だが、気持ちに余裕がないときはさすがに多少気が立ってしまう。イライラすると周りに迷惑をかけてしまうからな。できるだけイライラせずに過ごしたい。何より心身ともに疲れてしまう。イライラすると、誰にとってもいいことがないのだ。

「成瀬さん」

「なんだ？」

ほんの一秒前まで目を吊り上げていた岩崎だったが、すぐにハの字眉毛に変化させて、

「あの、私は今日もいろいろやることはありませんで、忙しいのですが、何かありましたら、すぐに連絡してくださいね。忙しいながらもお手伝いできることはあると思うので」

ま、俺とて本当に何もないとは考えていない。こういうイベントごとはたいいてい何か起こる。昨日だって、小さいながら紛失物や迷子など、多数の事件があったらしい。その一部がTCCに流れてこないとも言切れない。それに、岩崎がこんな状態であることが、

すでに事件であるような気がするね。これがのちのち伏線にならない
ければいいのだが。

何かあるような予感を若干抱えていた俺であつたが、こんな状態
の岩崎を前にこんなことは言えないので、とりあえずこう言つてお
く。

「そうそう事件なんて起きないだろうよ。余計なこと考えていない
で、あんたは自分のやることに集中しろよ」

「余計なことなんて、そんな……。私はただ、最近では迷惑をかけ続
けていたので、ちょっとした恩返しのもりで……」

迷惑をかけているのはいつものことだ。恩返しなんてことを考え
るくらいなら、二度と迷惑をかけないように行動してもらいたいね。
これは本音だが、さすがにこんなことは言えない。いくら、岩崎が
相手だとしてもな。

「せつかくの文化祭だ。そんなことを考えていたら、もったいない
だろう。精一杯楽しめ。これが俺からの注文だ」

「成瀬さん……」

これから文化祭二日目、大げさに言うとは最終日が始まるうとして
いるのに、なぜ暗くなっているんだろうか。しかも、悩む必要など
ないことに対して頭を悩ませているなんて、これほど阿呆らしいこ
とはないだろう。俺に気を遣ってくれるようになったのは大した進
歩だと思うが、そのせいで岩崎らしさをなくしてしまつては元も子
もない。こういう祭り事を楽しむのが岩崎だ。俺みたいに、騒ぐこ
とがあまり好きではないやつのことなど放っておいてもらいたいね。
これが俺にとっての文化祭の楽しみ方なのだ。

「分かりました。私は思い切り文化祭を楽しみます。ですから、何かありましたら絶対に連絡くださいね」

ですから、の意味が分からないな。ま、ここがお互いの妥協点ということだろう。

「分かったよ。何かあったら連絡する。必要があったらな」

「またそうやってはぐらかす。私は真剣に言っているんですよ!」

俺だって真剣に言っているのだが。

何やらケンカめいたやり取りをしているうちに、朝のホームルームの予鈴が鳴った。そこでようやく俺の隣の席の住人、真嶋が参上した。普段は早めに来ている真嶋がここまで遅れることは滅多にない。珍しいこともあるもんだな、と思っていたのだが、やってきた真嶋を見て納得がいった。真嶋は制服ではなかった。どういふことかということ、

「真嶋さん、おはようございます。朝練ですか?」

「おはよう、岩崎さん。うん、去年のクラスのパフォーマンスなんだけど」

今日発表のパフォーマンスの練習をしていた、ということだ。真嶋はジャージを着ていた。ジャージで本番に臨むわけではないと思うのだが、ま、動きやすい格好ということなのだろう。人望の厚い真嶋のことだ。おそらく有志のパフォーマンスにも引っぱりだこだったに違いない。人気者は大変だな、と完全に他人事のように考えていると、

「ところで、成瀬」

急に話しかけられて、少し驚いた。その、ところで、の使い方があっているかどうか不明だが、おそらく真嶋の中ではつながっているのだろう。

「なんだ？」

「聞きたいことがあるんだけど、」

朝教室に着くなり話しかけられて、その一言目がそれか。何か緊張するな。真嶋の表情も真剣そのものだ。聞きたいこととはいったいなんだろうか。

「昨日、誰かと長い間一緒にいた？」

「は？」

何なんだ、その質問は。いったい何の意味があるんだ？

俺はすぐに反応することができなかったのだが、先に岩崎が反応した。

「私も気になりますね。すごく」

言っと、岩崎はちらつと真嶋のほうを見た。目があった真嶋は、何かを察知したようにうなづく。いったい何のやり取りだろうか。

それはまあ置いて、質問に答えてやるか。と、その前に一つ確認したいことがある。

「俺が昨日何をしていたか、あんたたちは知っていたはずだが」
「あ」

「あ」

同時に思い出したように声を上げる。そして、しまった、といったような表情になった。おそらくケンカを売るつもりではなかったようだが、俺としては若干イラッと来たので言わせてもらう。

「俺は昨日一日中グラウンドの特設ステージ脇のテントにいたよ。誰と一緒にいたか、というとそれぞれ委員会や有志で忙しく動き回っていて、暇ができたときたまーにやってくるあんたたちTCCのメンバーと一緒にいたな。とてもじゃないが、長い間、とは言えなかったがな」

どう考えても一人でいる時間のほうが多かった。別に誰のせいでもないし、一人でも大した労働ではなかったので、特別文句はないのだが、自由を奪われたことに対して若干の不満があった。ま、ちやんと分かってはいる。

文化祭は人気者、もしくはアクティブなやつほど予定が埋まりやすい。TCCの面々はなぜか人気者かつアクティブなやつが多く、俺以外の人間は断片的にしか暇な時間がなかったので、致し方がない。岩崎の提案なのに、岩崎が中心にならないことに多少の疑問を感じはするが、これも事故だと思って諦めている。何せ、もう終わったことだしな。しかし、二人はまだ申し訳なく思っているらしく、

「本当に申し訳ありませんでした！もう少し時間が取れると思っていたのですが、考えなしに予定を入れてしまっ……」

「あたしもほとんど手伝えなくて、ごめん」

仕事がない奴に、仕事が回ってくるのはもはや必然である。二人が謝ることじゃない。加えて、今回は文化祭だ。いろいろ動き回っ

たほうが楽しいに決まっているし、予定を入れられるなら入れたほうがいい。これはしょうがないのだ。謝る必要などない。

とはいえ、しょうがなくても謝る必要があるときもある。これは挨拶みたいなものだ。俺とて謝罪を拒絶するほど、ひねくれているつもりはない。さつさと話を戻すでしょう。

「それで、さっきの質問はいつたいなんだ？何の意味があつたんだ？」

話の内容よりも、真嶋の真剣な表情が気になった。何か深刻な問題だったのではないか。俺はそう思い、真嶋に尋ねたのだが、

「あ、あれ？別に何でもないよ！ね、岩崎さん？」

真嶋は答えを濁し、岩崎に同意を求める。

「え？そ、そうです。別に大したことじゃありません。ちょっと気になっただけです」

岩崎も同様に、答えを濁して無理矢理終わらせようとしている。どう考えても『何でもない』ことでも『大したことじゃない』ことでもないような気がするな。これは嫌な予感と言えるのだろうか。先ほどの質問に何か意味があることくらい、誰だって見抜くことができるだろう。しかし、この二人はどうせ答えてくれないだろう。隠し事をされるのはあまり嬉しいことではないが、ここは大人しく引き下がるか。

「何を企んでいるか知らないが、俺を陥れるような真似だけはしてくれなよ」

半分冗談で言った一言だったのだが、

「陥れる、ですか」

つぶやいた岩崎の表情と口調は若干真実味を帯びていた。

「まさか、本当に罠でも張っているのか？」

「わ、罠なんて張ってないですよ！誤解です。ただ、広義の意味ではそう言えないこともないような……」

慌てて否定した岩崎だったが、内容は否定しきれていない。むしろ肯定していると言ってもいい。やれやれ、うかつに冗談も言えないな。

「ま、俺が誰かと長い間一緒にいるとは思えないから、関係ないと言えないが」

ここで担任が教室に入ってきたため、会話は終了した。形だけのホームルームが終わると、文化祭二日目が始まる。

9:00~10:00

文化祭自体は九時から始まる。しかし、一般開放は十時からだ。つまりこの一時間は、言ってしまえば直前準備のようなものだ。なので、この時間から文化祭を楽しもうとすると、展示を回るくらいしかないのだが、展示を回る生徒も実際はあまりいない。そんな時間に受付を任された俺は喜ぶべきか、悲しむべきか。

現在の教室、もとい展示会場は全く人がいない。うちのクラスの生徒はさっさとどこかへ行ってしまったし、展示を見る客もまだいない。ここにいる人間は俺と同種の他二名だけだ。つまり三人しかない。

まず一人はバドミントン部部长、三原。

「文化祭って、この浮かれた雰囲気がいいよね。みんな楽しそうで、忙しそうで、はしゃいでいて。昨日よりは落ち着いているけど、今日もそんな感じ」

楽しそうでうらやましい。岩崎のように攻撃的な社交性ではなく、程よい程度の社交性と積極性を持ち合わせているこいつは、いい意味で普通の生徒と呼べるだろう。普通の生徒として、模範的な姿である。対して、もう一人は、

「あ、そうだね。でも、私は少しついていけないかも」

内気で消極的な生徒の代表とも呼べる。同じくバドミントン部所属の戸塚。

この二人とは学年が上がってからたびたび会話を交えるようになったのだが、まだそれほど親しいとは言えない。しかしまあ俺の交友関係から言えば、親しいほうと呼べるだろう。それは、三原だけなのだが。なぜかというと、

「成瀬君は、昨日は文化祭を堪能できた？」

俺に話しかけてくるのは、もっぱら三原だけだからだ。

「さあな。楽しんだかどうかは微妙だが、文化祭気分を味わったことは確かだな」

「あ、そっか。昨日は一日ステージ運営をしていたんだっけ？」

「ああ。本当に一日中な」

「あらー……。それは災難だったね。ご苦労様」

社交辞令だということは分かりきっているのだが、無性に心に響く言葉だった。俺はそれほど精神的に参っているということなのだろうか。

心を落ち着けるために、俺は小さく息を吐いた。そして、そんな心の動きを悟られないように話題を振りかえす。

「そういう二人は、昨日は文化祭を楽しむことができたのか？」

「そうだねえ、昨日はずっと主催側だったね。だから今日はお客さんとして、文化祭を楽しむことにするよ」

正しい文化祭の楽しみ方と言えるだろう。正統派だ。模範生と言える。三原は文化祭をすっかり楽しんでいた。では、こいつはどうだろう。

「で、戸塚は？」

「え、あ、私ですか？」

お前の名前を言っただろうが。それ以前に今は俺達三人しかないのだ。俺が分かりやすくうなずくと、

「わ、私は特に有志とかやっていないので、美聡ちゃんの有志の出し物を見たり、友達の出店を見て回ったり……」

戸塚はアクティブではないため、有志のパフォーマンスをやったり出し物をしたり、ということとはしていないのだが、それでも正しい楽しみ方をしていたみたいだな。ちなみに『美聡』とは三原のことだ。部活も同じで、クラスも同じ。この二人は見た目通り、かなり仲がいいみたいだな。

それにしても、

「……………」

こいつはいつになったら俺に慣れてくれるのだろうか。別段好かれたとは思わないし、好かれる性格をしていると思っていない。しかし、もう少しまとものに会話をしてもらいたいね。引つ込み思案でシャイということなら、目を見て話せ、とは言わないが、そんなにおっかなびつくりしゃべられると、こちらも気を遣ってしまう。

この様子には三原も苦笑い。『困ったなあ』といった感じだが、ここは三原を頼らざるを得ない。さすがに無言で一時間過ごすのは気が重しいし、二人だけでも話してもらいたい。この際、俺のことはシカトしてもらっても構わない。

「そういえば、成瀬君」

とはいえ、何度も言うようにこの場には三人しかいない。二人で話すのも三人で話すのも大して変わらないし、嫌いでなければ普通話しかけるだろう。というか、自然に三人で話す展開になる。にもかかわらず、あえて二人で話していると雰囲気も悪くなる。三原がここで俺をシカトしないのは、当然と言えば当然である。

「なんだ？」

「昨日誰かと長い時間一緒にいた？」

「……………」

いったいどんな話を振られるのかと思ったら、今朝も聞いた内容だった。何の脈絡もない会話の中で、同じ質問を違う人間からされたら、これは偶然とは言えないだろう。しかもそれが、日常生活では滅多に問いかけられないような内容ならなおさらだ。

「あれ？私なんか変なこと言っただけかな？」

俺が黙り込み、さわやかとは無縁の顔をしたせいだろう、三原は焦ったように質問を重ねた。いや、まあ変なことと言えばそうなるのかもしれないが、実際質問自体はそこまでおかしいものではない。二回目だからこそ、俺はここまで渋い反応を見せただけだ。

「いや、その質問真嶋からもされたんだ。ホームルーム前にな」
「あ、そうなんだ」

またしてもいつもの苦笑。すっかり癖になってしまっているような感じが、で、質問の答えだが、

「長い時間同じ場所にはいたが、誰かと一緒にはいなかったな。一番長かったのは一人でいる時間だ」

「そういえば、そうだったね。本当にご苦労様です」

今度はわざとらしく頭を下げる三原。先ほど以上に丁寧な態度だったが、さすがに今回は俺の心を揺さぶりはしなかった。

「で、今の質問はなんだ？何の意味があるんだ？」

意味というか、その質問で何が分かるというのだろうか。誰か一人からされた質問ならばあっさり忘れることができるが、同じ質問を二人（岩崎を含めると三人）からされると、さすがに気になる。

「真嶋さん教えてくれなかったの？」

「はぐらかされた」

「まあ、そうだろうね」

なんだか知った風である。

「えっと、たぶん成瀬君はあまり興味ないと思うけど、」

と言って、三原は話し始めた。何とも興味を失う切り出し方である。

「マンガや小説で、よく『学校の七不思議』っていうフレーズが出てくるじゃない？今時は都市伝説っていうのかな。ま、何でもいいんだけど、うちの学校にもその七不思議ってやつがあるらしくて」

ここまで聞いて、さらに興味を失った。七不思議？都市伝説？バカバカしい。占いや怪談よりくだらない話題だと思うね。しかしま

あ、俺がきっかけで話し始めたのだ。一応最後まで付き合ってたやるとするか。

「文化祭限定の話なんだけど、学校にいた時間の三分の二以上を同じ人と過ごす、親密な関係になれるんだって。何でもその昔、文化祭で告白を決意した女生徒が、思いを寄せる男子生徒に一度も話しかけることができず、その日の帰りに自殺をしてみたらしいの。思いを伝えられなかった悲しみを知っている彼女が、死後もこの場所にとどまり、文化祭で恋愛を成就させようと思っている生徒を後押ししているんだって」

限りなく胡散臭い話だ。なんだその、とってつけたような設定は全く以てリアリティがないし、説得力もない。信じるか否か悩む以前の問題だ。悩むに値するきっかけすら存在しない。

「へえ……」

俺のため息交じりの返事を正しく受け取った三原はまたしても苦笑い。ま、こいつは話し始める前に、俺は興味ないだろうと宣言していた。思った通り、といった感じだろう。別に落胆した様子はないので、俺が申し訳なく思う必要もないわけだ。対して、

「へえ！」

俺と同じ言葉を発した戸塚だったが、明らかに俺とは違う反応を見せた。まさか、今の話で興味を持ったのだろうか。

「結衣は昨日誰かと一緒にいた？」

結衣というのは戸塚のことである。興味を持ったらしい戸塚に対

して、三原が声をかける。

「私は美聡ちゃんかな。でも三分の二までは届かないと思うけど」

「そっか。じゃあ私たちは親密な関係になれるね！」

「そ、そうかな……」

冗談めかした風に三原が言うと、戸塚はなぜか照れてしまったようだ。よく分らないが、二人はすでに仲がいいのだろう。なぜそこで照れる必要がある。

「ま、私とはこれで十分親密になったから、今日は別の誰かと一緒にいることをお勧めするよ。成瀬君もせっかくだから頭の片隅くらいには置いてみたらどうかな？」

「善処する」

信じる気には全くならないが、三原の言うとおり、頭の片隅に置いておくくらいならしてやってもいいだろう。どうせ今日はさほど考えることもないだろうし。それにしても片隅以上にスペースを与えてやるつもりもないが。俺はこんな様子だったが、

「え」

戸塚は、何やら深刻な雰囲気醸し出し、必要以上に真剣な表情を作った。そして、おそらく誰か特定の人物が頭を駆け抜けたに違いない、必要以上に赤面した。

「言われなくても、そう考えていたみたいね」

俺でも分かったのだ。付き合いの長い三原が気付かないはずがない。弱点を的確にとらえた三原の発言は、効果抜群だったようだ。

「そ、それより七不思議って、他にもあるの？」

あからさまな話題の転換だった。分かりやすいにもほどがあるな。しかし、そこをしつこくつつついて戸塚をからかうほど、三原は性格が悪い奴ではなかったようで、戸塚の要望通り、他の七不思議について話し始めた。その場にいた俺も七不思議についてずっと聞いていた。どうやら三原もそこまで詳しくないらしく、七不思議自体の話ではなく、その噂の話をしていた。ほしい情報が手に入らなかったわけだが、戸塚はいい聞き役になり、感心するほど聞き入っていた。

結局十時になるまで客が一切来なかったため、終始その話をしていたのだった。

10:00~12:00

クラスの出し物である展示の受付という任務から解放された俺は、昼食までの二時間、自由時間となった。特別用事もなければ、回りたいところもない俺は、とりあえずぶらぶらすることにした。

まず向かったところは、前日俺の居場所となっていたグラウンドの特設ステージ。今日は文化祭実行委員の連中と生徒会で共同企画したイベントをやっていた。これのおかげで、俺は今日解放されているわけだ。ま、もともと半分ほど生徒会に譲るということで、ステージ運営の許可が下りた代物である。当然と言えば、当然なのが。

連中の出し物もそれなりに盛況を見せていた。見た感じ、一番盛り上がっているのはステージ上にいる生徒会&文化祭委員の連中で、見物客とはやや温度差を感じる。運営が異常に頑張ると、客が引いてしまふんだよな。

続いて向かったところは、一番華やかな中庭。ここはステージがあり、出店があり、ベンチがあり、何しろ人が集まりやすいところなのだ。一番人がいると言っても過言ではない。出店とステージといつも以上の人の数で、今日の中庭は少し手狭な感じだな。こういうところに一人でいると、何気に疎外感を覚えるね。一人で行動している人間などおらず、みんな笑顔で楽しそうだ。対して俺はどうだろうか。傍から見た俺は、はたして楽しそうだろうか。きつと違っただろう。居心地が悪い。場所を変えよう。俺が体育館に向かうべく、人ごみをかき分け行軍していると、

「おい、成瀬」

不意に話しかけられた。目を向けると、そこには俺以上に似合っていない人物がいた。

「そこで何をしているんだ？」

「何って、見りゃ分かるでしょ。クレープ焼いてんの」

自称スーパー美少女お嬢様日向ゆかりだ。しかし、見慣れぬ恰好をしている。

「あんたがそういう格好していると、そこはかたく違和感を覚えるな」

日向はエプロンを着用し、頭には三角巾をかぶっている。別におかしくない。今は文化祭で、日向がいるのは出店なのだから。ただ、正直言って見慣れない。

「失礼ね。あたしだってキッチンに立つことくらいあるんだ。あたしは何でもこなすオールラウンダーだからね」

「オールラウンダーっぷりは昨日散々拝ませてもらった」

今日はクラスの出店で働いているようだが、昨日はTCC主催の特設ステージで活躍していた。最初は大人しくギターを弾いていたが、その後キーボードを担当し、最後にはマイクを握って、観客を魅了する歌声を披露していた。高校の文化祭であれほどのステージを披露できるやつはそうそういないだろう。マイクパフォーマンスも絶好調だったな。

「まあね。あたしみたいに才能に満ち溢れている人間は、その才能

で人々を楽しませる義務があるから」

「いったい誰が中心で誕生したバンドだったのだろうか。だが、それをとがめる人間は誰もいなかったし、軽音部女子たちは本当に日向に感謝していたようだった。ま、あれが成功のお手本のようなステージだったし、今更俺が苦言を呈するのはおかしいというものでろう。」

「あんたの才能のおかげで、昨日は助かったよ」

客のいないステージは、二重の意味で寒いだろう。そんな中でステージ運営など、考えただけでも嫌だね。しかし、礼を言うタイミングを間違えたな。なぜかこいつは今絶好調だ。先ほどの自信過剰発言を見れば一目瞭然。傲然と胸を張って、思い切り嫌なやつになるだろう。と、思っていたのだが、

「いや、あたし一人の力じゃないでしょ。みんなで作って、みんなで盛り上げて、みんな楽しんで。だから成功させることができた。これでいいんじゃないの？」

似合わない照れ笑い。意外だな。

「謙遜して、周りを評価するなんて、らしくないじゃないか」
「謙遜じゃなくて、正しい評価だよ。それに、」

照れ笑いが、苦笑いに変わった。

「一昨日から感謝されすぎて、ちよつと食傷気味なんだ。だから、あんたにまで感謝されると、胃腸炎になっちゃうよ」

どうやらこっちが本音らしい。褒められるのは慣れているので素直に受け取れるが、感謝されるのは慣れていない、ということか。これも珍しい気がする。

「それよりクレープ買っていきなよ。どうせ、まだ何も買ってないでしょ？少しは積極的に文化祭に参加しなさい。受け身じゃなくてね」

言われてみれば、俺は自分から参加しているという気分じゃないな。どうにも巻き込まれている気持ちになっている。しかし、俺はこういう大人数で騒いだりするのが苦手なんだし、人ごみに至っては躊躇いなく嫌いだと言えるレベルなのだ。やれ、と言われたからってそう簡単に気持ちを変化させることはできない。少なくとも、乗り気じゃない。と、そういえば、

「あんただって、こういうお祭り騒ぎは嫌いじゃなかったか？」

こいつは俺と違って、それなりに人気者だし、お嬢様であるにもかかわらず情に厚いし、ハートは熱い。しかし、群れるのはあまり好きじゃない。テンションも必要以上に上がらない。そんなイメージだったのだが、

「別に嫌いじゃないよ。ただ、苦手なだけ」

「どう違うんだよ」

「全然違うんだよ」

よく分からないが、違うらしい。

「ま、あまり好きじゃないのは確かだね。でも今回は結構楽しめているよ。周りと同じようにははしゃげないけど、あたしの中では十

分満喫しているよ」

こいつとの付き合いは、かれこれ一年になるが、こんな奴だった
だろうか？自分よりレベルの低い人間は完全に上から見下ろし、才
能のない奴を否定していたような雰囲気があった。誰からも距離を
置くイメージがあったが、どうやらそれも過去の話らしい。

「ま、つまらないよりは楽しいほうがいいに決まっているさ。その
気持ち、俺にも少し分けてほしいね」

「あんたは見ようとしていないだけで、楽しいことは周りに山ほど
転がっているよ。それはもう入れ食い状態だね」

「そんなもんかね」

「そんなもんだ」

言って、日向はクレープを差し出した。

「とりあえずこいつを分けてあげる」

よく分からないが、俺の気持ちは少しだけ軽くなった気がした。

「ありがたくもらっておく」

軽くお礼を言って、日向からクレープを受け取ると、

「四百円になります」

普通に代金を請求された。分けてあげる、と言われたから、てっ
きりご馳走してくれるのかと思ったのだが。それはともかく、

「高くないか？」

いくら文化祭価格とはいえ、高く過ぎるだろう。これでは俺でなくとも、買う気がしないだろう。いや、それにしてもいぶん忙しそうだな。これはどういうことだろうか。クレープにとんでもない仕組みが隠されているのだろうか。この謎は日向の言葉で全てすっきり解決した。

「それ、二つ分だから」

「どういうことだ？」

俺は二つもいらぬぞ。と思っていると、日向はたった今自分で作ったクレープを適当にラッピングすると、そのままかぶりついた。

「こっぴつこと」

つまり、日向が今食べた分まで俺に請求したらしい。おこれ、ということか。

「何で俺があんたの分まで払わなければならない」

「いいじゃない。今日は文化祭なんだし。楽しまなきゃ損でしょ」

あんた、すっかり楽しんでるな。こっぴつ行事は苦手なんじゃないかったのか？

「早く払いなさいよ。四百円になりまーす。別に二百円でもいいけど、そしたらあんたが手に持っている奴を返しなさいよ」

どうしても俺におごらせるらしい。ま、今回は大目に見てやる。最近世話になりっぱなしだったからな。二百円で済むなら安いものだ。

「毎度あり！」

俺が手渡すと、お嬢様らしからぬ言葉を言って受け取った。そして、

「お礼に面白い小話を一つ」

さらにらしくないことを言い始めた。

「あんた、文化祭の七不思議って知ってる？」

またその話か。しかも、日向が。

「ああ」

「さすが天下のＴＣＣ。この手の話題は得意分野かな？」

俺としては全くの専門外だが、ＴＣＣらしいとは言えるかもしれない。ま、聞いたのは今日が初めてだが。

「文化祭当日にケンカすると、その後一生仲直りできないらしいよ。何でも文化祭でケンカしたカップルが翌日二人とも事故で命を落としたんだって。その後毎年そのカップルの霊が文化祭に現れて、ケンカしたカップルを不幸に陥れているんだって」

「何とも縁起の悪い七不思議だな」

三原から聞いたやつは、夢見がちな女子生徒が適当に作ったであろう楽しいな雰囲気が出ていたが、こいつは後味の悪い話だ。正直聞きたくなかったね

「ま、あんたたちにそんな心配はないと思うけど、二人がケンカするとこつちに火の粉が降りかかってくるんだ。仲良くしてよ」

「善処する」

なぜ日向に火の粉が降りかかるのか、それは置いておくとして、これ以上人間関係の面倒事は勘弁願いたい。ケンカなんかしたいと思わないのは、俺とて同じ気持ちだ。

「あれ？あたしはあんたたち、としか言っていないけど、あんたと、誰のことだか分かったの？」

からかうような、楽しんでいるような、そんな視線を向けてくる日向。何となくだが、こいつは俺が面倒事に巻き込まれることを望んでいるような気がするな。人の不幸を楽しむのはいい趣味とは言えないぞ。

「誰が相手だろうと、ケンカなんてしたいと思わないだろう」

「正論ね。正論過ぎて、つまらないわ」

正論を言っで、非難されるのはさすがに納得いかないぞ。しかも、理由がつまらないから、なんて、わがままが過ぎるぞ、お嬢様。

「ま、いいわ。とにかく、文化祭くらい楽しみなさい。そんな仏頂面していると、幸福が逃げるわよ」

「大きなお世話だ」

言っで、今度こそ俺は体育館に向かった。

体育館は異様な雰囲気だった。俺が足を踏み入れた時、ダンス部のパフォーマンスの最中で華やかでリズムカルな雰囲気だった。ダンス部のパフォーマンスが終わると、今度は有志によるバンド演奏で、そのあとはまた有志のブレイクダンス。次は声楽。今度はバンド演奏なのだが、アルトサックスがいるためややジャズテイスト。

といった感じで、五十分ごとにグループが代わり、演目内容が変わる。全く統一感もなく、客もひっきりなしに入れ替わる。いろいろ混沌とした雰囲気だ。午後一からは一時間ばかり演劇部が独占して、演劇が行われるらしい。もはや何でもアリだな。

体育館に来ては見たものの、前のほうまで行って観覧する気になれず、入り口付近でいつでも退散できるよう壁に寄りかかり、立ち見を敢行していた。

今までやっていたグループが終了すると、またしてもざっと客が移動を開始する。出ていく客と、入ってくる客が入れ替わる。その様子をぼんやり眺めていると、不意に、

「あ、成瀬」

声をかけられた。声がしたほうに焦点を合わせると、

「相変わらずつまらなそうな顔しているね」

そこにいたのは隣のクラスの知り合い、天野だった。

「そんな顔しているか？」

「自覚ないわけね。っていうことは案外楽しんでいるの？」

そついうわけでもないが。

天野は一緒に来た友達を先に行かせ、一人俺の隣にやってきた。

「いいのか？何か見に来たんじゃないのか？」

「この次の次。友達がダンスするらしいから冷やかしに来たの」

つまり今のステージには興味なしということか。

「あんたとこうして話すのも久しぶりね」

俺に話しかけたのは、友達のステージまでの時間つぶしということらしい。

「そりゃあんたは俺のことが嫌いなんだ。当然だろう」

「別にあんたは嫌いじゃないわ。あんたの協調性のないところと自覚のないところが嫌いなだけ」

協調性がない、というのは自分でも知っているが、自覚がない、とはどういうことだろうか。天野の言葉に、俺は慚然となる。しかし、当の天野はまるで意に介さず、新たに会話を開始した。

「聞いたよ」

脈絡がなさすぎて、何の話か分からないぞ。と、普通なら思うところだろうが、俺には思い当たる節があった。

「真嶋のことか？」

「うん。ＴＣＣに入部したんだって？」

真嶋がＴＣＣに入部した。これは事実だ。いったい何でこのタイミングなのだろうかと思うのだが、岩崎は理解できていたようで、二つ返事で了承していた。ま、動機は不明だが、断る理由もない。

「あたしから見たら、何で今更って感じだけど」

「あんたは今更入部した理由を聞いたのか？」

「詳しくは聞いていないけど、何か心境に変化があったらしいよ」

心境の変化ね。それは俺も思い当たる節がある。心境が変わった理由は分らないが、とにかく真嶋は変わった。文化祭の準備辺りから、妙に張り切っている雰囲気があった。真嶋はことあるごとに手伝わせてくれ、と俺に進言してきた。それは、今までの真嶋とは違っていた。何に対する姿勢が変わったのか分らないが、とにかく積極的になっていた。

「いい変化だったのかね」

「さあね。でも変わることは自然なことだと思うよ」

それはそうかもな。人間は環境に適応できる生き物らしい。住めば都、郷に入っては郷に従え。このことわざはともに環境の変化に対して適応することのたとえだと言って差し支えないだろう。

「そういうあんただって変わったと思うぞ」

「そうかな？」

「俺が初めてあんたと話したときは、尖ったナイフみたいなやつだった」

「そりゃあんたのせいでしょ。あたしはもともとマイペースで穏やかな人間なの」

穏やかでマイペースね。にわかには信じられないな。ま、今となつては尖ったナイフ、というたとえのほうが似合わないのは確かだな。

「とにかく、あんたは今すぐ変わりなさい。その根性なしで後ろ向きな性格を何とかしなさい」

もしかして、その話がメインだったのか？真嶋の話は引き合いに出しただけか？

「急には無理だな。生まれたときから後ろ向きなんだ」

「そんなわけないでしょ。まさか、逆子だった、なんてつまらない冗談を言うつもりじゃないでしょうね」

うまいこと言ってんじゃねえよ。

「生まれつき後ろ向きな人間なんていないわよ。人間は前しか見えないんだから。だからあんたが後ろばかり見ているのは、考え方の問題よ」

結局説教になるのか。少しは丸くなったかと思つたが、どうやら俺の勘違いらしい。嫌いじゃないとは言っているが、『生理的に嫌い』から『考え方が嫌い』になっただけ、ってことか？あまり嬉しくないね。

俺がさりげなく嘆いていると、自称マイペースの天野は、またしても話題を唐突に変化させた。

「ところで、あんた文化祭の七不思議って知っている？」

おいおい。天野までそんなことを言い出すのか？七不思議ってや

つはそんなに流行っているのか。うちの学校の行く末が気になるね。

「最近よく聞くな」

「そ。あんたはある意味専門だしね」

「嫌なこと言っな」

俺は占いだの都市伝説だの、ってやつは全く信じていないし、詳しくもないし、興味もないぞ。そんな俺に、専門、だなんて言うんじゃない。勘弁願いたいね。

「文化祭当日からイメチェンすると、必ずうまく行って、ひいては人生を変えてしまうらしいよ。何でもその昔、根暗のいじめられっ子がクラスの人々を見返すために、一人でヘビメタやったらしい。そしたらものの見事に成功して、その後アーティストになってしまったんだって。今でもその人の魂がここに残って、生徒の意識改革を後押ししているらしいよ」

「だんだん話のつくりが雑になってきているな……」

もはや俺は話を楽しむ始めていた。どれも必ず妙な根拠こじつけがついて、最後は必ず霊的なものの暗躍がある。もしかして、全部一人が作った話じゃないだろうな。でなければ、こうも同じような構成にならないような気がする。もしくは『文化祭の七不思議制作委員会』などという意味不明な団体が裏で動いているのかもしれないな。この思考もどうでもいいな。

「とりあえず、手始めに文化祭を楽しみなさい」

「そうは言ってもな……」

「ちようどいいわ。一緒にあたしの友達を冷やかしに行きましょう」

「は？何で俺がそんなことを……」

俺が抗議に出たところ、天野は武力行使に出た。

「あんたの意識改革の手伝いをしてあげるって言うてんのよ。無理矢理でもいいからはしゃぎなさい。綾もいるから！」

友達、としか言っていなかったから、俺の知り合いはいないのかと思っていたが、どうやら真嶋も参加しているパフォーマンスだったらしい。真嶋がいようとまいと、俺ははしゃげないのだが。

天野は俺の腕を引く。俺は一応抵抗したが、周りの目が気になって、なりふり構わずというわけにはいかず、結局天野の言いなりになってしまった。

友人のダンスが始まると天野はにやにやしながら手拍子と妙な合いの手をしていた。俺はというと、はしゃげるはずもなく、適当に手拍子をしていただけだった。

一方真嶋はというと、どうやらこちらに気づいていたようだ。しかし、踊っている最中は一度もこちらを見ず、結局最後まで俺を見ようとしなかった。おそらく恥ずかしかったのだろう。

曲が終わると、天野はやはりいちゃもんをつけてきたが、俺は適当に躲して、逃げるように体育館を後にした。気が付けば、昼休みになっていた。

12:00~13:00

ようやく午前の部が終わり、昼休みになった。かばんは部室においてある。なので、必然的に部室で昼食をとる。たとえばかばんが教室にあったとしても、俺は部室で昼食をとっていたと思うが。

俺が部室に向かうと、道中で岩崎と真嶋に出会った。

「あ、成瀬さん。部室でお昼ですか？」

「ああ。かばんが部室にあるからな」

「我々も一緒にしてよろしいですか？」

別に確認なんていらぬ。あの部室は俺だけの物じゃないしな。もちろん俺はオーケーだ。岩崎も当然オーケーなのだろう。さて、もう一人はどうだろうか。

「真嶋がよければ、な」

俺の言葉に、真嶋が視線を上げる。睨みつけてくるが、迫力はまるでないな。しかし、そんなに恥ずかしかったのだろうか。なんと真嶋は、俺と会った瞬間から、顔が真っ赤だった。

「真嶋さん、どうかなさったんですか？」

「別に、何でもない」

何でもあるような答え方だった。当然岩崎は、俺に疑いのまなざしを向けてくる。仕方ない、俺から言うとしよう。

「午前中、真嶋のダンスを見たんだ」

「それだけ、ですか？」

岩崎の疑問はもつともだろう。俺も、それだけか、と問われれば、たぶん、としか答えようがない。なぜなら、他に心当たりがないからだ。

「その辺は本人に聞いてくれ」

俺と岩崎は真嶋を見る。すると、

「だって、まさか成瀬に見られるとは思わなかったんだもん……」

そんなこと言われてもな。俺とて見る気などなかったし、真嶋がいつどこで何をやるか、全く知らなかったのだ。全ては天野のせいだ。ま、天野がいなくとも、おそらく俺は真嶋のダンスを見ることがになっただろう。しかし、真嶋に気づかれることはなかっただろう。そういう意味では、真嶋の中で、見られた、という意識は芽生えない。ということ、やはり全て天野のせいなのだ。

「……………」

恥ずかしそうに顔から火を噴いている真嶋を見て、岩崎は何やら思案していた。そして、

「成瀬さん。私も午後にいくつかパフォーマンスに参加するんですけど」

「そうか」

「私も午後にいくつかパフォーマンスに参加するんですけど！」

何なんだ、こいつは。何をアピールしているんだか。そんなに見

てもらいたいのか。真嶋とは正反対のリアクションだな。ま、こいつはハードルが高いほうが燃えるタイプだからな。

「分かった。見に行つてやるから、時間と場所を教えろ」

「はい！約束ですよ」

ようやく部室にたどり着いた俺達三人は、席に着くや否や、弁当の包みを解いた。

「成瀬さんは午前中、何をしていたんですか？」

「俺は展示の受付。そのあとは適当にぶらついていた」

「そうですか。どうです？少しは楽しんでいますか？」

どうだろうか。会う奴会う奴に、もっと楽しめ、と言われたせいで、何となく気が重くなっているような気がする。

「そういうあんたはどうだ？午前中何をしていたんだ？」

「私は、最初来校者の皆さんの案内をしていましたね。そのあとは少し自由なじかんがあったので、いろいろ見て回りました。泉さんの占いにも行きましたよ」

そういや、姫は久しぶりに占い少女に戻っているんだったな。今ではただの生意気な小娘になっているが、最初はそんな肩書だった。

「真嶋さんはいかがですか？何か面白いものはありましたか？」

「え？そうだなあ……。あたしはやっぱみんなのパフォーマンスを見ているのが一番楽しいかな。あと、まだうちのクラスのプラネタリウム見てないから、午後はそっちに行こうかな」

「ああ、そういえば私もまだプラネタリウム見てないです。一緒に行きませんか？」

「うん。いいよ。何時ごろ？」

「そうですねえ、昼休みが終わった直後でどうですか？」

「うん。いいよ」

いいね、行きたいところがたくさんあるやつらは。こうして予定がどんどん埋まっていくからな。かといって、うらやましいわけでもないが。

「成瀬さんはいかがですか？一緒にプラネタリウム行きませんか？」

とても魅力的なお誘いで、その心遣い痛み入るが、残念だな。

「午後一でまた受付だ」

なぜだか俺はまたしても展示の受付を任されてしまっているのだ。確かに俺は暇だし、昨日はまるで手伝うことができなかったが、この扱いは納得できない。

「あ、そうでしたね。ご苦勞様です！」

劳われても嬉しくないぞ。

「今度の相方は誰ですか？」

「戸塚だ」

一日二度受付をやる。しかも、相方が同じ。なかなかない偶然だよな。おそらく戸塚も暇なんだろう。友人のパフォーマンス巡りくらいしか予定がないようだしな。

「あれ？確か、午前中も戸塚さんと一緒じゃなかった？」

今まで黙り込んでいた真嶋がようやく復活した。それほど恥ずかしかったのだろうか。まだ、顔の赤さは取れていない。

「よく知っているな。午前中は戸塚の他に三原もいたが」
「……………」

今度は深刻そうな顔をして黙り込んだ。一体何なんだ？情緒不安定にもほどがあるぞ。

「……………」

隣で岩崎も黙り込んで、何か考え事をしているような顔をしている。どうということだよ。

「どうした？」

俺が岩崎に話しかける。この二人が、俺が感知できない電波を受信したのかと思っていたのだが、

「あ、えーつと……。そ、そうですね！今年の文化祭は、いろいろな噂があります！」

とりあえず急激に話題を変えてきた。よく分からないのだが、どうやら俺が触れてはいけない話題だったようだ。変なやつらだな。

えー、それで、岩崎は何と言った？今年の文化祭でいろいろな噂？あー、嫌な予感がするな。そんなことを言われて思い浮かぶのは、

一つしか、あ、いや、三つほどあるな。

「えー、成瀬さんは『文化祭の七不思議』って知ってますか？」
「……………」

やはり来たか。どいつもこいつも、同じことばかり言いやがって。何がそんなに面白くて、七不思議なんぞに現をぬかしてやがるんだ？ 今日が文化祭だからって、頭の中までフェスティバルになってしまっているのだろうか。

「……………それで、その『文化祭の七不思議』とやらがどうかしたのか？」

「ええ。文化祭当日に大切なモノを失くしてしまうと、その後の人生において、さらに大切なモノを失くしてしまう、という話なのですが、」

「そいつは大変だな」

もうこの状況に慣れてしまった俺は、適当に相槌を打つ。

「そうなんです。でも、文化祭のうちに失せ物が見つかったら、その後の人生でもう二度と大切なモノを失くすことはない、らしいですよ。何でも、その昔、文化祭で財布を失くした双子の女生徒がいまして、片方は一生懸命探してその日のうちに見つけ出し、もう片方はどうでもいい、と適当に探して結局見つけることはできなかったそうです。すると、今まで似たような人生を送っていた二人だったのですが、その日を境に、全く違う人生になってしまったようです。それ以来、二人の女子生徒の霊が文化祭に出没し、自分と同じ未来を歩む生徒を探しているとか」

ため息。この話を聞いた俺の感想は、この一言だね。もういい加

減にしてもらいたい。これで四つ目か。みんなこの程度のクオリティの作り話に振り回されているのだろうか。にわかには信じがたいが、どうやら噂として蔓延し始めているらしい。悲しいな。

「そうなんだ、あたしも気を付けないと！」

「ええ。昨日も盗難や紛失物がいくつかあったそうなのですが、その中にはまだ見つかっていないものもあるようですよ」

「そっか！それって盗難も含まれるんだ。なおさら気を付けないといけないね」

俺を差し置いて、何故か盛り上がる二人。この場合、おかしいのは俺のほうなのだろうか。

「それにしても、」

ひとしきり盛り上がると、俺に話を振ってきた。

「成瀬が七不思議を知っているとは思わなかったよ」

「この手の噂からは一番縁遠い人ですからね」

確かにな。先ほどは天野から専門、などという迷惑極まりない勘違いをされていたのだが、二人は正しい評価をしていたらしい。もしかすると、俺は周りの人間から占いだの都市伝説だのに詳しい人だと思われているかもしれない、と思ったが、そうでもないらしい。

「で、誰から聞いたんですか？」

俺はすでに七不思議のうち、四つ知っているのだ。なので、誰から、と問われれば、四人の名前が上がるのだが、七不思議、というも

のの存在を知ったのは三原との会話がきっかけだった。いや、待てよ。

「きっかけは、あんたたちとの会話だな」

「え？」

「朝、昨日誰かと長い間一緒にいたか、という話をしただろう」

思い出したのだろう。二人の表情が凍りついた。

「三原に同じ質問をされてな。理由を聞いたとき、七不思議の存在を教えてもらった」

「あ、ああ、そうですね」

「へ、へえ」

何だ、こいつら。やはり何か企んでいたのだろうか。

「確か、文化祭の三分の二以上を同じ人と過ごすと親密になれる、だっけ？ どうせ俺は誰とも親密になれないだろうよ」

「あ、別にそういうことが言いたかったわけではないのですが……」

「じゃあどういうことだよ」

「そ、それは……」

言い淀んでいる時点で怪しいことこの上ないのだが。ま、この調子でいけば、今日も誰かと三分の二以上行動を共にすることはないだろう。この手の噂で、俺が関係ありそうなものなど、ほとんどないと言っている。それは残念がるところなのだろうか。

「そんなに拗ねないで下さい！ 所詮眉唾物の噂話ですよ。適当に面白がって、笑い話にすれば十分です」

それをあんたが言うのか？朝、岩崎と真嶋はかなり真剣な表情で聞いてきたじゃないか。まさか、あれは俺を騙すための演技だったのか？つまらないことに演技力を使うな。

まあ、それはそれとして。

「七不思議というからには、その噂は当然七つあるんだよね？」

「え？ええ、おそらくあるんだと思いますよ」

おそらく、とは曖昧な答えだな。

「あんたも全てを知っているわけじゃないのか？」

「はい。まあ噂なんで、ちゃんと定義されているわけじゃありませんし、口頭のみで伝えられているので、同じ噂でも微妙に差異が発生しちゃったりしているものもあります」

もとは七つだったようだが、どうやら枝分かれしてしまっているらしい。

「私が知っているものは、一応四つだけですな」

なんと、俺と同じ数ではないか。

「あたしは三つだけ」

そして、俺のほうが真嶋より多い。これは喜ぶべきか否か。俺は全く興味ないのだが、案外世の中というものはそういう風にできているのかもしれないな。本当に欲している者は得られず、大して欲していない者が手に入れる。いや、このたとえばはおかしいな。岩崎や真嶋だってそこまで真面目に収集しているわけではなさそうだし。

それにしても、七不思議ね。すでに四つ知ってしまっている。興味ないと言いつつも、だ。どうやらまことしやかに噂は広まりつつあるようだし、中には振り回されている連中もいるかもしれない。そう考えると、何か起きてもおかしくないのかもしれない。俺のあずかり知らないところで何が起こつても知らぬ存ぜぬで通すことはできるのだが、噂が勝手に俺の下に集まっているこの状況をかんがみるに、心中穏やかではられない。俺が思うことは一つだ。

「何か、嫌な予感がするな」

13:00 ~ 14:00

さて。昼食の時間が終わった俺は、展示の受付を再度全うしようと教室に向かった。朝一の時間も人が全く来なかったが、午後一もおそらくほとんど来ないだろう。昼食が終わって、さて展示でも見よう、なんてやつあまりないだろう。午後一から体育館で演劇部の舞台もやるわけだし、こちらにはあまり人は流れてこないと思う。

もともとやる気などないわけだし、人が入らなかったからと言って、別に困ることもないので、はつきり言っただうでもいい話ではあるのだが、

「……………」

一つだけ問題があった。それは俺の相方に由来する。

「……………」

昼間、岩崎たちに言ったが、今回も相方は戸塚結衣だ。しかも戸塚一人だ。残念ながら三原はいない。なので、会話が成立しないのだ。

客が全くいないとなると、手持無沙汰だし、何しろ気まずい。客がいれば、気まずさもないし、一応仕事もあるからこんな気持ちにならなくてもいいのだが。……とりあえず話しかけてみるか。

「戸塚」

「ひゃ、ひゃあい！な、なんででしょうか？」

いきなり話しかける気を失くしてしまった。そんなに驚かなくてもいいだろうよ。俺のほうが驚いてしまう。

「あんた、昨日も受け付けやっついていなかったか？」

「え？ああ、や、やったけど、何で？」

「すでに昨日やったんだったら、今日は二回もやらなくてよかったんじゃないか？」

「え？でも、他にやることもなかったし、そ、それに……」

やはり暇なのか。しかし、暇だからと言って、受付をやるうとも思わない。俺がなぜ今日二回も受け付けをやっているのか、というと、昨日一切手伝いをしていないからだ。昨日何かしらの仕事をやっていたら、今日は朝の一回でお役御免とばかりに、他のことをしていたと思う。特に用事がなくても、な。

「……………」

「……………」

そしてまた沈黙。会話とは、こんなに難しいものだったのか。いや、俺とて自分のコミュニケーション能力の低さを認めている。しかし、これほどまでに会話が続かないと、さすがにシヨックを隠し切れない。しゃべることを苦手としている二人なのだから、仕方がないと言えば仕方がない。諦めるべきか。すると、

「な、成瀬君は何で二回も受け付けやっっているの？」

あからさまに無理矢理ひねり出したような話題。なんだかかわいそうになってくるね。俺も含めて。

「俺は押し付けられたんだよ。昨日はクラスの手伝いを何もやっていないからな。だから今日だけでもしっかり手伝え、ってことだろうよ」

「あ、あー、そっか。そうだね！」

「……………」

「……………」

あー、もう駄目だ。どうにもならない。ここまで会話が下手くそな二人が集まっていったい何ができるだろうか。何もできないだろうよ。どうせ俺は会話が下手くそだよ。情けないが、これは認めざるを得ないようだな。

こんな感じで、俺と戸塚はぽつぽつと会話を続けた。そんな苦痛な会話を二十分ほど続けていると、徐々に客が入り始めた。こうなると、来客の数に反比例するように気まずい空気は減少していき、無理矢理しゃべる必要性も感じなくなってくる。その辺りから、俺と戸塚の会話は激減していた。

しかし、所詮は高校の展示。常に客がいるはずもなく、しばらくすると客は全てはけ、またしても二人きりになってしまった。すると、

「あ、あのさ、成瀬君！」

待ってましたと言わんばかりに、戸塚が話しかけてきた。なんだ、いきなり。

「どうかしたのか？」

「う、うん。わ、私ね！」

と、ややテンション高めで、嬉々とした表情を浮かべた戸塚が元
気よく話しかけてきたのだが、気になるその内容は聞くことができ
なかった。

「結衣ちゃん！」

名前を呼ばれた。もちろん俺ではなく、戸塚の名前だ。戸塚は喉
まで出かかっていた会話を飲み込み、声のほうへ視線を移動させる
すると、

「彩衣ちゃん！」

そこには同じ年くらいの女子がいた。友人だろうか。俺は全く見
覚えがないので、うちの高校の同学年ではないだろう。先輩か、あ
るいは中学時代の友人か。どちらにしても、名前で呼び合うほどの
仲なのだろう。見た目だけだと、年上に見えるな。

「ど、どうしたの？こんなところに」

「ん？どうしたのって、遊びに来たに決まってんじゃない。一度、来
てみたかったんだよね」

これで決まりだ。うちの高校じゃないな。

「で、結衣ちゃんは何をしているの？」

「何って、展示の受付だけ」

「ふーん。それっていつ終わるの？」

俺を差し置いて、二人は会話を重ねていく。こういう時、何をし
ているのが正解なんだろうな。『誰？』とか『受付は十四時までだ
よ』とか言って、二人の会話に参加するのが、正解なのだろうか。

だとしても、俺にはできないな。とりあえず視線を外して黙っているのが吉だな。というか、それしかできない。

「受付は十四時までだよ」

「じゃあそのあと、高校の案内してよ。結衣ちゃんの高校がどんなところか見て回りたいし」

「うん、いいよ」

やけにここの高校に興味津々なやつだな。そんなに興味があるなら、うちの高校に来ればよかったのにな。いや、来たくても来れなかったのかもしれない。そう考えると、未練からの興味なのかもな。しかし、今更感も無きにしも非ずだ。ま、どうでもいいな。それに、さすがに聞きすぎだろう。他人の会話を盗み聞きするような趣味はない。込み入った内容ではないし、聞き耳を立てているわけではないが、何となく後ろめいたので、俺は興味を教室内の風景に移した。また、徐々に客が入ってきたな。と言っても、特別やることなどないのだが。

それから二人はしばらく会話を紡いでいた。内容は聞いていなかったが、とにかく楽しそうだったので、やはりそれなりに仲のいい友人なのだろう。二人の様子を見ていて、ふと思い浮かぶ。そういえば、うちの中学の同級生とか来ているのだろうか。俺は特別仲のいい友人はいないが、麻生なら誰かと会っているかもしれないな。そう考えると、文化祭というのは軽い同窓会になるようだ。確かに会いやすい状況ではある。今のところ、誰かに会ったりしていないが、見かけたら声をかけてみるか。

「ところで、」

俺がぼんやり考え事をしていると、

「その男は結衣ちゃんのクラスメート？」

その男とは、おそらく俺のことだろう。学校のことに加えて、生徒にも興味を持ち始めたようだ。というか、戸塚の生活そのものに興味があるのかもしれないな。もしかしたら、この女子は戸塚のことが好きなのかもしれない。ま、冗談だが。それにしても、初対面の人間に対して、その男、呼ばわりするとは、教育がなっていないな。

「あ、えっと、うん。同じクラスの、成瀬君」

紹介してもらって悪いが、俺はどうすればいいんだ。とりあえず、何かしらの挨拶めいた言葉を吐いておいたほうが吉だろう。

「どーも」

すると、

「ふーん、成瀬君、ねえ」

よく分からないアクションを見せた。なんだ、どういう意味だ？ そいつは二秒ほど俺のことをじっと見た後、

「初めまして、成瀬君。あたしは戸塚彩衣です。姉がお世話になっています」

戸塚、彩衣。そして、姉。つまり、

「あんだ、戸塚の妹か？」

「うん。そうだよ」

「ってことは、年下か」

「もちろん。今は中学三年だよ」

驚いた。まず姉妹というところに驚いた。全く似ていないな。パ
ーツをよく見れば似ているかもしれないが、パツと見、まるで似て
いない。そして、戸塚が姉、というところに驚いた。どう見ても、
戸塚のほうが妹だろう。戸塚結衣のほうが背が低い、ということも
あるが、戸塚彩衣が大人びている。中学三年だと？見えないだろう。

「で、他のクラスメートはどこにいるの？噂のあの人、見てみたい
んだけど」

「こ、こら！何言っているの？」

それにしても仲のいい姉妹だな。おそらく家でもこんな感じなの
だろう。正直、クラスメート以上に仲良く見える。

「ま、いいや。とりあえず、何か食べに行こうよ。あたし、何も食
べてなくってさ。臨時収入が入ったから、おごっちゃうよ。成瀬君
も来る？」

「ちよ、ちよつと彩衣ちゃん？」

俺は遠慮させてもらうぜ。二人と一緒に行動する気にはなれない
な。パツと見は大人びているが、中身は子供だな。俺は子供が苦手
なんだ。

「臨時収入って何？お母さんから、お小遣いでももらったの？」

これまた子供のエピソードだな。戸塚家では文化祭があるからっ
て、小遣いがもらえるのか。微笑ましい話だと思って聞いていたら、

「いや、さっき財布拾った」

全然微笑ましくなかった。

「ダメだよ、持ってきてちゃ！その人、絶対困っているよ」

この辺りはさすがに姉だな。戸塚が常識人でよかった。

「大丈夫だって。中身あんまり入ってなかったし」

なおさらかわいそうだ。というか、そういう問題ではない。彩衣は自分のカバンから、拾ったらしい財布を取り出した。男らしい、黒くてでかい長財布だ。

「これ、どこで拾ったの？持ち主探さない」と

「平気だって。落としたほうが悪いんだよ」

そういつてやるな。間違っていないが、落としたくて落としたわけじゃないんだし。それに、お前が言っているいいセリフではない。

「いいから。拾った場所を教えて」

「むー。体育館だよ。舞台のそでで拾った」

舞台のそでだと？お前、そんなところで何をしていたんだ？ま、それは置いといて、確か、今の時間は演劇部の演目がやっている時間だ。そうなると、舞台そでにあるものは、演劇部の物である確率が高い。直接演劇部の連中に渡してしまってもいいが、それも面倒だ。

「とりあえず、文化祭本部に届けよう」

あとは連中がどうにかしてくれるだろう。

「うん。そうだね」

戸塚は納得してくれたが、

「えー、ちょっと待ってよ！あたしが拾ったんだけど！」

彩衣のほうは納得してくれなかった。

「これは歴とした犯罪だ。警察に突き出されたいか？」

「盗んだわけじゃないよ。あたしは拾っただけだし」

「刑法245条『逸失物等横領罪』」

「何よ、それ」

「拾ったものを横領することだ」

俺は適当に説明すると、彩衣から財布を奪った。失礼、と心の中で断りながら、中を見る。個人を特定できるものはないな。他にはレシートやポイントカードの類が無駄に入っている。肝心の金銭は、彩衣が言っていたようにほとんど入っていない。かなりルーズな人間らしい。とりあえず、こいつは届けてやらないと。

「何か食べたきゃ、自分の金で買え。もしくはお姉ちゃんにねだるんだな」

その後、十四時まで一応受付の任務を全うしてから、財布を持って文化祭本部へ向かった。

14:00~15:00

受付を次の係りの連中に引き継ぐと、俺たちは文化祭本部に向かった。俺たちというのは、俺と戸塚姉妹の三人である。正直俺一人でもよかったんだが、戸塚の、

「彩衣ちゃんに最後まで責任を取らせたい」

という真摯な願いを受け入れ、了承した。学校ではやや頼りない戸塚だが、家ではしっかりしているらしい。姉として、きちんと妹の教育をしているようだ。それでもこんな風に育ってしまったのは、やはり戸塚が最後の最後で甘やかしてしまっているからだろう。戸塚らしいと言えば、戸塚らしいな。

文化祭本部に到着すると、彩衣が係の女生徒に話しかける。

「すみません。これ、落とし物です」

「ありがとうございます。お預かりしますね」

マニュアル通りの反応で対応する係の女生徒。一応一言声をかけておくか。

「財布の失せ物の届け出は来ているのか？」

「えーっと、つい先ほど来てますね」

落とし物名簿なるものを見ずに、係の女生徒が答える。おそらく彼女が応対したのだろう。

「黒の長財布を体育館で失くした、というものでした」

完全にビンゴだな。これで、問題は解決だ。

「私たちが届けてきます。お名前は解りますか？」

言い出したのは、戸塚、えーっと結衣のほうだ。妹の問題は自分の問題とでも思っているのだろう。今日の戸塚がいつもと違って見えるのは、気のせいではないはずだ。

「えっと、名前はうかがっていませんね。というか、まだ届いていない旨を伝えたら、すぐさま出て行ってしまったので、何も分かりません」

「……………」

かなり怪しいな。何も言わずに出ていくとは。自分の物だったら、そんなことはしないだろう。ただの人見知りで恥ずかしがり屋、ということではあるまい。何か後ろめたいこともあるのだろうか。

「うちの生徒だったか？」

「はい。一年女子でしたね」

ここに来たタイミングが良かったのだろう。受け付けたこの女子生徒も、記憶に新しいため、細かいところまでよく覚えている。しかし、なんだか面倒になってきたな。それにしても、

「女子、ねえ」

黒くてでかい長財布なんて、完全に男物だろう。俺は信じて疑わなかったのだが、探しに来たのは女子か。誰かに頼まれたのか。だとしても、自分の名前くらい明かさないと、見つかった時に連絡し

ようがない。怪しいことこの上ないな。

「あの、成瀬君……。どうしましょうか？」

俺に聞かれてもな。とりあえず、ここにいてもしょうがない。財布は一応ここに預けるとして、この後どうするか、だな。

何やら巻き込まれたらしいことを薄々感じ始めた俺は、ため息を吐いた。どうしてこういろいろなことに巻き込まれてしまうのだろうか。いや、待て。考えてみれば、まだ逃げ出すことは可能だ。財布を預けてしまえば、とりあえず失せ物探しからは解放される。さっさとここを離れよう。しかし、

「すみませーん。お、成瀬じゃん」

そうは問屋が卸さないらしい。

「あと、戸塚さんだっけ？隣の子は知らないな。お三方、難しい顔してどうしたの？誰か落し物でもしたの？」

麻生だ。今日初めて顔を見たが、相変わらず楽しそうでうらやましいね。

「お前こそ、こんなところにどんな用だ？」

「あー、財布失くしちゃってさ。探しに来たわけ」

嫌な予感がする。いや、もう予感なんて曖昧なモノじゃない。これは確信だ。俺はもう逃げられないらしい。

「一応聞くが、財布ってどんなやつだ？」

「黒の長財布」

「こんな感じのやつか？」

俺は手に持っていた例の長財布を見せる。

「そうそう。まさにそんな感じのやつだよ。というか、全く同じじゃないか。それ、誰の？」

ビンゴだな。

「おそらく、お前のだ」

「は？」

「なるほどねえ」

俺たちは、文化祭本部にいた受付の女子生徒に事情を話し解放してもらうと、麻生を交えた四人で、TCCの部室に来ていた。俺たちが麻生の財布を持って、文化祭本部にいた経緯を話し終わると、麻生は納得の頷きを返し、

「結局どういうことなの？」

納得はしたようだが、理解はできていなかったらしい。麻生の質問に答える前に、麻生に質問をしなければならぬ。

「財布を失くしたのは、いつだか分かるか？」

「いや、正直分らないな。学食で昼飯を食べようとして、財布がないことに気づいたんだ。だから昼の時点でももうなかったね」

「単純に落とした可能性は？」

「低いと思うぞ。パフォーマンス前にカバンに仕舞ったところまでは覚えてるんだ。だから落とした、というのは考えにくい」

「カバンはどこに置いたんだ？」

「ああ、パフォーマンスの間はステージ裏に。他のみんなも一緒に置いてあったんだけど、他に盗られたやつはいなかったな」

なるほど。で、彩衣のほうは、

「あたしはさっき演劇部が舞台やっていると、舞台のそでで拾ったの」

時間に食い違いが出ている。ま、二人とも嘘はついていないだろう。根拠はないが、嘘ついているように見えない。それに、財布を探してやってきた女子生徒のことを鑑みると、答えはおのずと導き出せる。

「これは二重窃盗だな」

麻生は午前中に財布を盗まれている。盗んだ人物は、先ほど財布を探して文化祭本部に来ていたという女子生徒。その女子生徒は、盗んだ財布を、今度は体育館の舞台そでで落とした。そして、それを拾ったのが戸塚彩衣だ。で、今に至る。

「じゃあ話は簡単だね。演劇部に行つて、『犯人はこの中にいる』つてやればいいんでしょ？」

十中八九、犯人は演劇部の連中だろう。彩衣の言い回しは置いと

いて、そうやるのが一番単純で簡単な方法だ。俺も、それに賛成だ。さっきの受付係の女子を連れて行けば、おそらく特定できるはずだし、

「ちょっと待てよ。そりゃ状況証拠にしかないだろう。それに探しに来た女子を犯人だと言い切るのはいささか早計だと思うぜ」

全く以てその通りだな。加えて、演劇部員だというのも、百パーセントではない。全て、可能性の話でしかないのだ。『おそらく』とか『たぶん』で犯人だと言い切るのは危険すぎる。それに、

「それに、今回の窃盗は、単純な金品狙いじゃないと思うぜ。だって、財布からは金が抜かれていなかった。普通、財布盗んだら金だけ抜いて、あとは捨てるはず。見つかったら、言い訳ができないからな」

それも、その通りだ。そして、それ以上におかしいのは、盗んだ財布を探して、文化祭本部にまで足を運んでいたことだ。もし、その女子生徒が犯人ならば、そんな目立った行動をとるのはおかしい。盗んだ財布を落としてしまったから、探す。確かにせっかく盗んだ財布を手放すのは惜しい。しかしそれ以上にリスクが高い。犯行後、犯人は目立った行動を避けるのがセオリーだ。それなのに、彼女は探しに行き、あぐく文化祭本部にまで足を運んでいる。普通の窃盗では考えられないことだ。

ま、それは置いていて。

「お前の考えは理解できた。それで、お前はこれのあとどうしたい？」

俺が聞くと、麻生は嫌な感じでニヤツと笑い、

「決まってるだろ。探偵ごっこは男のたしなみだぜ」

麻生のガキっぽい発言を受けた俺たちは、さっそく部室を飛び出し、捜査に赴くことになった。文化祭が始まる前から、忙しい、と豪語していた麻生は、言い出しっぺのくせにひとまず十五時までしか捜査に参加できないらしい。何でも、十五時からはクラスの店番があるようだ。全くいい身分だよな、こいつ。

「そついや、俺の財布を拾ってくれたのは、戸塚妹だったよな？」

俺に聞いてきたようだったが、俺が答える前に、

「そうそう。本当は使ってやろうかと思ったけど、持ち主のことを考えて、思いとどまったの。感謝してよね」

どの口が言いやがるんだ。財布を取り出したときは、自分の釣果を見せびらかすように自慢げだったじゃないか。しかも、彩衣は普通に使いこもうとしていた。それを俺と戸塚で止めたんじゃないか。全く、とんでもない妹だな。さぞかし姉も手を焼いているんだろう。俺は横目でちらっと戸塚を見る。すると、慈愛に満ちた表情で妹のことを見ていた。おそろくかわいくてしょうがないのだろう。それは、わが子を愛でる母親のようだった。

俺の視線に気づいた戸塚は、はっとして、顔を真っ赤にすると、

「あの、すみません……」

なぜだか謝られた。彩衣の態度は置いといて、

「あんだ、本当に妹が好きなんだな」
「すみません」

謝る必要など、これっぽっちもない。姉妹仲がいいのはいいことだ。親とも友達とも違う存在。自分に一番近い存在だと言って間違いないだろう。それが同性なら、なおさらだ。

「しかし、似てないな。あれだけ大雑把で適当で、天真爛漫な性格とてもじゃないが、あんだの妹には見えない」

「よく言われるの。私は彩衣ちゃんが大好きで、いつも彩衣ちゃんみたいになれたらな、って思っているの」

ま、戸塚は大人しいからな。明るい性格にあこがれる気持ちは理解できる。俺とて、たまーに麻生の性格をうらやましく思う時がある。しかし、

「あそこまで底抜けに明るくなる必要はないぞ。大人しくて、慎み深いのは日本人の美德だと思え」

戸塚結衣が、彩衣みたいになっちゃったら、何となく残念だ。おそらく二人を足して二で割るくらいがちょうどいいのだろう。

「あ、ありがとう……。その、嬉しいです、すく」

喜んでもらえたなら、幸いだね。

「よし！捜査前に何か食おうじゃないか。腹が減っては何とやらだ。キミ達三人に敬意を表し、俺がご馳走してやる」

前方を歩く麻生が、振り返ってこんなことを言い出した。おそろく彩衣にそのかされたのだろう。麻生は単純なやつだ。簡単に口車に乗せられてしまう。

「そうは言っても、麻生。お前の財布、ほとんど金入ってなかったぞ」

「そんなことねえよ。千円は入っている。それに、知っているか、成瀬」

千円程度で自慢するんじゃない。それに、嫌な言葉を吐くんじゃない。

「今、うちの学校は『文化祭の七不思議』ってやつが流行っているんだ。その中の一つに、文化祭で他人のために出費すると、その後一年間、倍以上の謝礼が返ってくるらしい。何でもその昔、資金不足で文化祭ができなかった頃、一人の生徒が自分のポケットマネーから出資して、文化祭を開催したらしい。その後出資した生徒は文化祭で培ったマネージメント力を生かして、起業して大成功を収めたらしい」

それ文化祭関係ないだろう。単にそいつが才能を努力で磨いた結果だろう。そいつから言わせたら、奇跡なんて言葉で片付けられちゃたまったもんじゃないはずだ。それに、一生徒が文化祭の費用全額負担って、どういうことだよ。何者なんだよ、そいつ。ま、どうせ作り話なんだし、こんな下らないことに突っ込みを入れてもむなしいだけなのだが、どうしても作り話のクオリティーの低さに物申したくなってしまうね。

「へえ、いい話だね！素敵！」

「そんな話があるんだね。じゃああたしもおごっちゃおうかな！」

こんな時だけ意見を同じくするなよ、戸塚姉妹。似なくていいところが似てしまったな。二人とも残念すぎるぞ。

ともかく、これで五つ目か。残り二つになっちゃったな。残り二つは、どうかまともなモノであってもらいたいね。

こうして、文化祭の七不思議に頭を悩ませながら、俺は捜査を開始した。

15:00~16:00(前書き)

遅くなりました。申し訳ないです。

15:00~16:00

十五時になると、麻生はいつも通りのにやけ面で、

「じゃあ、捜査よろしく。俺は俺のほうで情報を集めておくぜ」

「集めるったって、お前は店番だろう。どうするんだよ」

麻生はこともなげに、

「演劇部の連中に話を聞いてみるよ。世間話の延長でな」

うむ。こいつ、ずいぶん簡単に言いやがる。俺では到底できないことだ。明るく気さくな人間は、それだけで得をしていると思うね。これは社会性のない人間の癖みだと思ってくれ。

「なんか分かったら教えてくれ。捜査も楽しいが、事実関係も気になるんだ。なんてったって、俺は被害者だからな」

ずいぶん楽しそうな被害者がいたもんだな。

「お前も何か分かったら、教えてくれ」

「むろんだ。ワトソン君」

何になりきっているのか、丸分かりだな。俺は医者でもお前の助手でもないぞ、と突っ込みたい気持ちは山々だが、麻生のほうは時間みなさそうだし、適当に頷いてこの会話を終わらせた。

「あー、俺のサイフは引き続きお前が持っていてくれ。どうせこの時間は使わないし、もう盗まれたくないからな」

「ああ。分かった」

店番が終わった後、また集合することを約束すると、俺たちは別れた。

さて。これから何をしようか。正直乗り気ではないし、一番乗り気だった人間もいなくなってしまったので、かなり手持無沙汰になってしまっている。とりあえずこの場にいる同朋に尋ねてみるとうよう。

「これからどうする？」

「え？わ、私ですか？」

同朋その一。戸塚結衣。

「私は、別に……。でも少しだけおサイフ盗んだ人のことが気になるかな。あ、でも、成瀬君がいやだっていうなら、全然いいんだけど……」

意見なのか提案なのか、それとも単なる独り言なのか。一応願望らしき発言をしたのだが、いまいちその真意が分からなかった。ま、慎重深い戸塚のことだ。自分の願望らしき発言をできただけでも十分だろう。いつもならば、『みんなに合わせる』的な発言をしていたところだ。

戸塚結衣の意見（願望）は理解した。では、もう一人の同朋の意見はどうだろうか。

同朋その二。戸塚彩衣。

「うーん、犯人探しもいいけど、あたしはもっと文化祭を見て回りたいな。まだ全然見てないし。せっかく結衣ちゃんの高校に来たんだから、結衣ちゃんの友達にも会いたいな」

もつともな意見だ。戸塚彩衣はうちの高校の文化祭に来たのだ。

何も犯人探しに付き合う必要はない。ま、その文化祭に来て事件を起こした張本人であるのだが、形の上では事件は解決し、被害者も彩衣を恨んだりしてはいない。こいつは解放してやってもいいかもしれないな。とはいえ、こいつだけ解放しても、かわいそうかもな。彩衣は、姉である結衣を追ってきたのだ。そして、その目的は結衣の高校を見ることと、その高校生活を垣間見ることだ。となると、彩衣のサポート役兼案内役を結衣に任せるのが最善かもしれないな。

「じゃあこのあとは別行動、二手に分かれることにしようか」

二手とは、当然俺と戸塚姉妹、の二手である。

「犯人探しは基本的に俺が引き受けるから、戸塚は妹を案内してやれ」

「え？あの……？」

突然の宣言に、混乱したように言葉を詰まらせる戸塚姉。一応言っておくか。

「犯人探しがしたいなら、案内しながらすればいい。探すって言っただって、どうせ聞き込みくらいしかできない。文化祭をぶらぶらしながら、知り合いに声をかければいい」

「そう、ですね……」

結衣が発した言葉は、表面だけとらえれば納得、了承したように

聞こえた。しかし、表情・声色・雰囲気を読みれば、一目瞭然。明らかに不満がありそうだった。

「一応言っておくが、これは間違っても命令じゃない。何か不満があるなら言ってくれ」

俺の発言に対して、反射的に顔を上げ、何か言おうとした結衣だったが、言葉が出てこず、結局黙り込んで俯いてしまった。なんだろうな、俺が悪いのか？

俺はどうしたらいいのか、判断できずにいた。一応反論異論はない。なので、決定を下して、別行動をとることはできる。しかし、どう見ても心の中に反論を抱えているらしき戸塚結衣を目の前にして、俺はそんな決定を下せるほど心が強くない。

さて、どうしたものか。こうしている時間ほど無駄なものはないわけなのだが。

「じゃあさ、」

口を開き、この空気を打開したのは、この場における最年少戸塚彩衣だ。

「成瀬君が言ったことを三人でやればいいんじゃない？ 結衣ちゃんにはあたしを案内して、成瀬君は聞き込みをやる。これって、別行動じゃなくてもできるよね？」

言われるまでもなく、もちろんその通りだ。しかし、俺としては、何も効率だけを考えていたわけではなく、仲睦まじい戸塚姉妹の間に、俺が割って入るような状況を回避する意味も込めて別行動を提

案したのだ。

と、俺の考えを改めて表明しようとしたのだが、

「そ、そうだね！それがいいよ！そうしよう！」

結衣の、無駄に元気で大きな同意を聞いたら、そんな心遣いは無用だという結論に至った。しかし、なんだってそんな大きな同意をしたのだろうか。ほら見る。おかげで、戸塚の声を聴きつけた連中が、何事かと色めきだっているじゃないか。

「う、ごめんなさい……」

周りの視線が付いた結衣は、いつものように小さくなってしまい、同時に、興奮して大きな声を出してしまった自分を、今更ながら恥じたように、顔を真っ赤にして俯いた。

無駄に目立ってしまったことはさておき、結衣の発言によって俺たちのスケジュールが決まった。

「じゃあ適当にぶらつくでしょう。戸塚妹はどこに行きたいんだ？」
「え？いいの？」

この発言は彩衣の物で間違いないのだが、隣で結衣も同様の質問を口にしたそうな表情で俺を見ている。俺は、そこまで驚かれるような発言をした覚えはないぞ。考え方もいたってシンプルだ。いいの、と聞かれれば、即座に首肯する。

先ほども言ったが、結衣は俺が知っている中でもトップクラスに慎重深い。他人に対して、自分の意見を押し付けることは絶対にし

ない。自分の意思を表明することも滅多にない。そんな結衣が、俺に進言したのだ。そうしよう、と。その行動にどれほどの決意があるのか。俺には計り知れない。

「俺もまだ文化祭を楽しんでないんだ。できれば、誰かに案内を乞いたいところだったんだ」

「なるほど。じゃあ結衣ちゃん、案内役よろしくね」

しばし茫然としていた結衣だったが、意味を理解すると、

「う、うん！分かった！」

と、またしても元気よくうなずいた。

指針が決まったところで、まず最初の行先を決める。

「成瀬君は、どこか行きたいところある？」

「特にないな」

即答した俺に対して、結衣は少し困ったような表情を作った。俺の意見など、適当に捨て置いてもらいたいね。それより文化祭を満喫したいという願望を語った、実妹の意見を聞いてやってくれ。

「あたしはプラネタリウム見たいな。これって、結衣ちゃんたちが作ったんでしょ？さっきは展示しか見れなかったし、とりあえずそこ案内してよ」

「うん。分かった。あの、成瀬君もそれでいいかな？」

「構わんよ」

俺は最初から何でもいいのだ。犯人探しだって、正直どうでもい

い。

そうして、我々奇妙な三人組は、我がクラスに向かった。

目的地に到着するまでも、戸塚彩衣は文化祭を楽しんでいた。道中の発表・展示にことごとく興味を持ち、その度に寄り道をしていた。

すでにいくつかの展示やら発表やらを見て回ったのだが、飽きずにまた新たに一つ、どうやら興味を持ったようだ。その教室には大きく『占い館』と書かれていた。

「ねえ、ここ見ていきたいんだけど」

今更とやかく言わない。好きなだけ寄り道すればいい。どうせプラネタリウムは逃げやしないからな。というか、完全に道が違うから、もう目的地なんてあつてないようなものだ。俺がここにいる理由もあつてないようなものだな。

しかし、

「……………」

占い、ねえ。あまりいい思い出がないな。俺は信じていないというのに、なぜこれほどまでにさまざまな思い出があるのだろうか。今年度の初めにやたら振り回された思い出があるな。あれは大変だった。もう二度と、占いなんかに関わりたくない。

と、そういえば……。

「あら、あんたがこんなところにいるなんて、まだ懲りていないのかしら。それとも、快心でもしたのかしら。だとしたら、もう一度考え直したほうがいいわよ」

会った途端になんてこと言いやがる。俺が自ら占いに近づくことではないね。俺の意志でなくとも、近づきたくないね。懲りてないだと？冗談言つな。もうこりこりだ。

「考え直すも何も、占いに興味はない。今までも、今も、これからもな」

「あ、そ。安心したわ。とうとう気が狂ったのかと思った」

口が悪いにもほどがあるな、この娘。とうとうとはどういう意味だ？気が狂う兆しがあったということか？ならば、少しは気を遣ってもらいたいね。

そこに現れたのは、TCCの唯一の一年。岩崎以上に齒に衣着せないこの女は、泉紗織で間違いない。TCCが誇る、占い少女だ。半年ほど、占い少女であることをすっかり忘れていたが、この度めでたく復活したらしい。有志で行っているこの占い館の一員である。

「よく見れば、また違う女を連れているわね。全くいいご身分だと」

「何かとんでもない誤解をしているようだから言うておくが、ただのクラスメートとその妹だ」

「こ、こんにちは」

「どーも！」

俺が紹介したと勘違いした戸塚姉妹は、自己紹介を始める。

「あの、成瀬君のクラスメートをやらせていただいています、戸塚結衣と申します。成瀬君にはことあることにお世話になっており、今も、あの、姉妹ともどもご迷惑を……」

恥ずかしいからやめてもらいたい。やらせていただいている、ってなんだ。戸塚に迷惑をかけられたことはあまりないぞ。確かにコミュニケーションがとりにくいとは思っているが、それに関しては俺のほうにも問題はあるわけで……。とにかく意味不明な持ち上げ方はやめてもらいたいね。どう考えても誤解を生みそうだ。戸塚は俺のことを、神か何かと勘違いしているんじゃないだろうな。

「あはは。妹の彩衣です」

姉とは一転、かなり能天気な感じで名乗る彩衣。いや、本来ならこんな感じで十分なのだ。そもそも自己紹介なんて必要ない。ただ、ばったり会っただけなのだから。

「ふーん……」

戸塚姉妹の紹介を聞き、じっくり観察した後、姫は意味深な感じでうなずいた。なんだ、嫌な感じがするな。こいつ、絶対あらぬ誤解をしているに違いない。

「ま、いいわ。あんたがどんな知り合いと付き合おうと、私に被害がなければ好きにするといいわ。で、占いに来たんですよ。私でよければ占ってあげるけど」

自分勝手な娘だ。自分から言い出したくせに、一方的に会話を打

ち切りやがって。

姫はTCCの中では、俺の次に常識人である。言っていることはたいていの射ているし、突飛な発言をしたりもしない。ただ、わがままで口が悪い。姫は一年で、最年少だ。にもかかわらず、誰に対しても敬語を使ったりしないし、俺や麻生に至っては先輩とも呼ばれない。

俺や麻生は上下関係にうるさくないからいいものの、将来はもつと年長者に対して気を遣えるようになったほうがいいぞ。

姫は先頭切って占い館に入っていく。俺たちもそれに続く。中はよくある占い館のイメージなのか、若干照明を落としてある。暗幕カーテンを使って外からの光を遮断し、蛍光灯にも、セロファンで明かりの色を調整している。実際とは違うのだが、ま、万人受けするイメージということなのだろう。

机や段ボールなどで仕切られた一つの小部屋に案内された俺たちは、置いてあったイスに腰かけた。その対面に占い師であるところの姫が座る。

「じゃあさっそく、と言いたいところだけど、」

「何かあるのか？」

何かと思ったら、姫は怪しく微笑んだ。ヘンゼルとグレーテルを見つけた魔女のようだ。どう見ても楽しいことにはならないような気がする。

「あのさ、さっきいつに現在進行形で迷惑かけているって言うんだけど、何かあったの？」

姫が話しかけたのは俺ではなく、戸塚結衣のほうだった。

「何で、それをお前に話さなければいけない」

「あんたに聞いてないでしょ。戸塚先輩に聞いているのよ。ねえ、教えてくれない？」

「え？あの……」

戸塚は困惑し、俺を横目でちらりと見た。俺の許可が必要だとも思っているのだろうか。そういう態度はやめてもらいたいね。戸塚自身に悪気がないのは分かっている。しかし、どうにも体裁が悪い。何か俺が威圧しているように見えるではないか。クラスメートはどう思っているのか、せいぜい気になるところだ。

「戸塚の妹がサイフを拾ったんだ。それを戸塚妹がネコババしようとしていたから、阻止して文化祭本部へ持っていったんだ。そしてそのサイフが盗まれた麻生のものだ。今、情報を集めているんだ」

あんたに聞いていない、と言われたにもかかわらず、俺が話したので、何か嫌味を言われるだろうと思っていたのだが、姫はさらにいやらしい笑みを深くして、

「へえ。それで、そのサイフは？あんたが麻生に渡したの？」

「いや、まだ俺が預かっているが」

俺が答えると、途端にがっかりした表情になる姫。そして、

「何だ、面白くない」

何で麻生にサイフを返していたら、お前が面白い気分になるんだ。

全く理由が分からないぞ。

「こんな話知っている？」

嫌な感じで切り出した姫。あー、これはいろいろ聞き覚えのあるフレーズだな。

「文化祭の七不思議って知ってる？」

「よく知っている」

残念ながら、大当たりだ。

「へえ。なら話は早いわ。文化祭の最中に大事な物を失くした人に、その失くした物を届けてあげると、とても親密になれるみたいよ。何でもその昔、文化祭の最中に大量の現金が入ったサイフを失くした女性がいたらしいの。結局とある男性がそのサイフを届けてくれたらしいんだけど、その男性は盗むことはおるか、謝礼も請求せず、名前も明かさずに立ち去ろうとしたの。その男性の紳士な姿を見た女性は一目で恋に落ちてしまったらしいわ」

ふむ。今回の作り話はなかなかのクオリティだな。まず間違いない、今までで一番まともな話だろう。それで、なぜ姫が『面白くない』と表現したかというと、

「もし、あんたが麻生にサイフを渡していたら、とても親密になれるのに、残念ね」

別に残念でも何でもない。これ以上麻生と親密になってどうするんだ。現状で十分だ。それに、姫はいつたい何を期待しているんだ。いや、分かっている。先ほど戸塚姉妹に言ったセリフからも、一目

瞭然だ。こいつは俺が困っている姿を見ただけなのだ。全く、いい性格だな。

「へえ。それは、いい話だね」

「うん。七不思議はいい話が多いね」

姫の下らない冗談など、全く聞こえていなかったとばかりに、戸塚姉妹は仲良く雑談している。よく考えたら、サイフを拾ったのは俺ではなく、彩衣だぞ。だから麻生と親密になるのは、彩衣のはずだ。

それを姫に言うと、

「大事な物を拾ってあげると、とは言ってないわ。届けてあげると言ったのよ。だから、あんたの手から麻生に渡れば、親密になるのはあんたなの」

それは屁理屈なのではないのか。考えたのが誰だか分からないが、それを意図して、届ければ、という言い回しを使ったかどうか怪しいことこの上ないね。

「さ、くだらない話はここまでにして、占いを始めましょ。どっちが受けるの？」

これまた言い出したのは姫だったのだが、先ほど同様勝手に話を切り上げて、本題に戻った。本当に自分勝手なやつだ。しかし、姫の勝手に不満を感じていたのは俺だけだったようで、

「はい！あたしが受けます！」

元氣よく彩衣が手を上げる。

「そ。じゃあ私の正面に座ってくれる。で、手を出してくれる」
「はい」

彩衣は言われた通り、姫の正面に座り、手を差し出した。どうやら姫は手相占いをするようだ。

「手相占いか。あたし、占ってあまり信じないんだけど、手相だと結構信憑性あるような気がするんだよね」

見てもらいながら、姉に話しかける彩衣。ま、自分の身体的特徴から読み取る占いだからな。血液型や星座占いよりは信憑性があるような気がするのは、俺も理解できるところだ。だが、結局占いの域を出ない。科学的な根拠がつけられるようなものなのだ。絶対はない。当然だろう。

「結局占いは絶対じゃないのよ。占ってというのは、『当たるも八卦、当たらぬも八卦』と昔から言われるように、初めから、必ず当たるっていうものじゃないの。だから当たる当たらないで文句を言うのはおかしいの」

今年度の初めに、占いをもとにいろいろやっていた姫だが、とある計画の道具として占いを選んだわけではなく、最初から占いに興味を持っていたのだろう。

「占いの歴史は古く、深い。王や貴族たちより権力を持っていた時期もある。それはなぜか。人間は漠然とした不安を嫌うから。それは現代でも一緒。だから今では占いが溢れているし、かなり身近になってきているでしょ。要は当たる当たらないというより、その人

の不安が拭えればいいのよ」

ずいぶん身勝手なこと言っているな。占いを受ける人間がそう思っているのはいい。しかし、占いをする側の人間が言っていたら、お前の占いは適当なんじゃないか、っていう不安で押しつぶされそうになるね。占い師が新たな不安を呼んでどうする。ただ、言わんとしていることは、的を射ている。

「確かにそうかも。だって占いの結果って、その時盛り上がるだけで結局忘れちゃうしね」

「そうだね。信じるのも、よかった内容だけだもん」

普通はそうだろうな。占い結果を頭から全て信じる人は少ないだろう。

「元来占いは災いを避けるためにやっていたことなのよ。だから本来なら悪い占いほど、信じたほうがいいの。その災いを避けるためにね」

「ああ、そうだね！いいことだったら、先に知らないほうが嬉しいし」

「でも、そうやって人の弱みに付け込んで、災いを回避するためにこの壺を買ってください、とかっていう詐欺が横行しているんじゃないのかな」

それもあるんだ。人の心は弱くもろい。何を信じるか、疑うか。正常な状態ならば、容易に判断できることも、時にはころっと騙されてしまう。

「ま、あまり深く考えなくてもいいわ。あなたたちのように適当に付き合えばいいのよ。占いに求めるものが変わっているのに、何で

未だに占いが愛されているか。それは自分自身や将来に不安を感じている人が多いってことよ。その不安を拭うために占いは存在しているのよ」

「そっか！じゃあ今までどおり、いいことだけ信じしていればいいんだね」

何かものすごく遠回りをしたが、結局元の場所に戻ってきたな。不安を拭うために存在している、ねえ。

「ということは、やはり占いはただの気休めなのか？」

穿った見方をすれば、ただの出来レースである。

『私は将来が不安です』

『あなたの将来は希望に満ちています。何も心配いりません』

『そうですか、ありがとうございます』

という会話を求めて、占いをしているということになる。なんだが、とても無駄なことをしているような気がするのだが。

「ま、言ってしまうえばそうね。でも、気休めでも不安やストレスを解消してあげなきゃ、大変なことが起きるかもしれないわ。窮鼠猫を噛む、っていうでしょ」

追い詰められた人間は何をするか分からない、ということか。確かに、不安で押しつぶされそうな人間に対して、残酷な真実を告げてしまったら、もう救いはないだろう。本人がそう自覚してしまつたら、正常に生きることは難しい。心が壊れてしまえば、人間はたやすく壊れてしまうのだから。

「さ、難しい話は終わり。そろそろ占いませうかね。ねえ、戸塚先輩もどうかしら。何なら、あんたも見せてやってもいいけど」

何がそんなに楽しいのか。急に上機嫌になった姫は、戸塚結衣を占いに誘い、あろうことか俺までも誘った。その後、完全に出て来レースと化した占いをやって、適当に笑い合つと、雰囲気の明るい占い館を後にした。

15:00~16:00 (後書き)

占いに関しての言及は、作者の独断と偏見です。
世間的な意見ではないので、
誤解なさらぬよう、よろしくお願いいたします。

16:00~16:30

姫の占いが終わると、その足で我がクラスのプラネタリウムに行った。プラネタリウムはそこそ盛況していたのか、割と客が入っていたが、半分くらいは行き場とやる気を失くしたうちのクラスの連中がたむろしているような状態だった。それは客が引いてしまうからやめたほうがいいと思うぞ。

戸塚姉妹が中へ入っていくのを見送ると、俺は隣の展示のほうへ向かった。プラネタリウムにはあまり興味がない。やはり星を見るときは実際の夜空がいい。たとえ周りが明るくとも、作り物より本物のほうがいい。簡易なものとはいえ、プラネタリウム作りに参加した俺がそんなことを言ってもいいのか、と思わなくはなかったけど、別段気にしないことにする。とりあえず、展示会場となっている自分のクラスに向かった。すると、

「あ、成瀬さん！」

クラスの前の廊下に、なぜだか岩崎がいた。こりゃ奇遇だな。

「どうしたんですか？展示を見に来たわけではないのでしょうか」

むろん、そんなわけない。しかし、それは俺のほうにも言える。

「あんたこそ、何でここにいるんだ？プラネタリウムは昼一で見に来たんだろ？」

「ええ、真嶋さんと二人で来ました。ですが、それはあくまでお客として来たまでです」

「じゃあ今は客として来たわけではないのか？」

「クラス委員として、ですかね」

苦笑気味に笑う岩崎。相変わらずだな。ただでさえ忙しいだろうに、自分の責任感のせいで余計な仕事を増やしているようだ。俺も思わず苦笑を返す。

「忙しいんじゃないかったのか？」

俺は岩崎の隣に、並ぶように壁にもたれる。

「え、ええ。まあ忙しいですけど……」

「けど、何だよ」

「ええと、まあこれも予定の一つなんで。それより成瀬さんがここに来るほうが意外です」

そうかね。俺は一応帰属意識を持っているつもりだが。ま、帰属意識でここに来たわけではないのは確かだな。

「戸塚の付き添いでここに来たんだ」

なので、意外と言われるのは道理なのかもしれない。つまり誰かの付き添いじゃないとここには来ない。当たっている。しかし、見事正解をたたき出した岩崎は、顔をしかめている。

「戸塚さんとずいぶん仲良しになったんですね」

おいおい。なぜそんなに不機嫌そうな声を出しやがる。クラスメイトと仲良くなって、いったい何が問題なのだろう。ま、仲良くなっただけではないので、それ以前の問題なのだが。

「別に仲良くなったわけじゃない」

いろいろあって、な。と言おうとして、すんでのところで思いとどまった。こんなことを言ってしまったら、岩崎は全てを放り出してでも、俺たちに協力するに違いない。それこそ俺たち以上に全力で。もう手に取るようにはつきりと想像することができる。

今日が平時ならばそれでも構わないだろう。岩崎は人の事情に首を突っ込むのが好きだし、おそらく岩崎が関わったほうがうまくいく気がする。しかし、今日は文化祭だ。岩崎はクラス委員であり、それ以上に私事の仕事を抱えている。こちらの手伝いをすれば、岩崎がこの日のために全力を挙げていた準備が無駄になってしまいうし、一緒に関わっていた周りの人間に迷惑をかけることになってしまう。こいつには黙っておくのが無難だろう。

「仲良くもないのに、文化祭と一緒に回ったりしませんよ。別に仲良くなること自体は悪いことではないですけどね。成瀬さんに悪意がなければ」

俺に悪意があると確信している言い方だな。一言言ってやりたいが、この話は深く追求しないほうがいい。話を変えよう。

「ところで文化祭の七不思議のことは調べているのか？」

「はい？特に積極的に調べてはいませんが……」

きょんとした表情になる岩崎。俺がこんなことを言い出すとは思わなかったのだろう。それはまさしく、意表を突かれた表情だった。さらに意表についてやるとするか。

「俺はあと一つでコンプリートだぞ。一応六つまで知っている」

「は？」

今度は啞然とした。うむ、相手の意表を突くのはなかなか楽しいものだ。岩崎のこういう表情は滅多に拝めるものではない。

「あ、あの成瀬さん。どうしたんですか？成瀬さんが七不思議なんて曖昧なものに興味を持つなんて珍しいですね」

ひとしきり楽しんだし、ここで種明かしをしてやろう。

「別に興味を持ったわけでも、積極的に話を集めていたわけでもない。話しかけると、相手が勝手に七不思議の話をし始めるんだ」

そこでようやく納得の顔を見せる岩崎。

「あー、なるほど。言われてみれば、今日は特に七不思議の話題が多いですね。みなさん、何かにつけて七不思議の話題を持ち出そうとするわけですね」

俺には信じられない話だが。中でも、俺にその話題を振ってくる連中の気がしれないね。俺が七不思議なんてものに興味を持つわけないだろう。俺のことを少しでも知っている連中なら絶対に知っているはずだ。しかし、あろうことか、その話題を振ってくる連中は、結構俺のことを知っている連中ばかりなのだ。これは嫌がらせなのだろうか。

「どうです？何かお気に召したものはありましたか？」

「俺が知っているのは、どれもクオリティの低いものばかりだ。気に入るところか、苦言を呈したいものばかりだ。作り話としても質が低すぎる。信じるなんて、言語道断だな」

「ずいぶんな酷評ですね。作った人に同情してしまいます」

苦笑する岩崎。言葉とは裏腹に、ずいぶんと楽しそうだった。

「あんたはどうだ？ 気に入ったのはあったのか？」

「私は結構どれも好きです。どれも作った人の思いを感じることができますし、素敵だと思います」

意外にも岩崎は、どれも作り話だと理解していたようだった。その上で素敵だと言う。

「あの完成度の低さでか？」

俺の酷評に対して、またしても苦笑。

「まあ確かに質は低いですし、雑な感じもありますが、それでも思いは伝わりますよ。『あー、こんなことあったらいいな』とか『こうだったら素敵だろうな』って気持ちはよく分かります」

俺と向かい合っていた岩崎は、ふと体の向きを変え、窓の外を眺めた。

「七不思議って、とても都合のいい話ばかりですよ」

そのとおりだ。だからとてもじゃないが、信じる気にならないのだ。

「楽しいこと、素敵なことを望むのは、人の真理です。中にはよくないものもありますけど、裏を返せば、そうなりたくない、と望む人が作った、と言えます。嫌なことが起こりませんように、楽しい

ことが起こりますように。その願いがそのまま七不思議になったのです。そう考えると、」

言って、岩崎は俺のほうに向き直る。そして、

「みなさん、よほど文化祭を楽しみたいんだな、って思いませんか？だって、文化祭限定の七不思議ですよ？これでもか、っていうくらい素晴らしい楽しみ方だと思いませんか！」

飛び切りの笑顔を見せる岩崎。こいつの顔を見て、俺は、

「なるほど」

と思わず、同意してしまった。なぜなら、目の前にいるこいつが誰より楽しそうで、嬉しそうな顔をしているのだ。その笑顔を見ると、こいつがなぜいくつも仕事を掛け持ちして、いくつも有志のパフォーマンスをこなしているのか、ということが分かったような気がした。ただ、楽しみたかったのだ。誰より楽しみたかったのだ。普通の生徒が二つの有志に参加しているとすると、四つも五つも掛け持ちしている岩崎は、普通の倍以上文化祭を楽しんでいることになる。満喫していることになる。むしろ単純にそうとは言えない。楽しみ方は人それぞれだ。俺は有志に参加したいと思わないし、仕事は少ないほうがいいと思っている。しかし、岩崎を見ると、岩崎の楽しみ方が正しくて、俺はかなり損をしているような気がしてきた。もちろんただの気のせいだろう。ただ、一瞬でもそう感じさせた岩崎は、やはりとんでもない奴なのだ。改めて感心した。

「そう考えると、成瀬さんも文化祭を楽しんでいるみたいですね」「俺が？」

「だって七不思議調べているんでしょ？」

「調べてない。向こうから勝手にやって来るんだ」

「向こうから勝手に？うらやましいですね。成瀬さんはまるで文化祭の申し子ですね」

意味不明にもほどがあるな。どうでもいいが、俺は嬉しくないし、楽しんでるつもりもないぞ。

「ところで、戸塚さんと二人で文化祭を回っているんですか？」

岩崎は急激に話を戻した。どうしてもそこが気になるらしい。

「二人じゃないし、悪意もないぞ」

「二人じゃないんですか？ではどなたと？」

これは言っても大丈夫だろう。

「戸塚の妹だ。姉の高校生活を覗きに來たらしい」

「へえ。ずいぶん仲のいい姉妹なんですね」

もう姉妹というか親友という感じだな。お互い名前で呼び合っているし。それでも、結衣のほうは姉という自覚があるらしく、どこかしこで妹をたしなめるような言動をすることがある。彩衣のほうもどこことなく甘えている様子がある。親友のような関係だが、それでもやはり姉妹だな。理想的、という言葉が冠につくのは間違いない。

「成瀬さん、無理矢理間に入って二人の関係を壊してしまつてはダメですよ。文化祭でケンカすると、取り返しがつきませんからね」
「その話は知っている」

七不思議ネタかよ。俺は七不思議など信じていないし、二人の間に無理矢理入るつもりもないし、二人の関係を壊すつもりもない。というか、なぜいきなりこいつに説教をされなければいけないのだろうか。しかも、ありもしないことで。

「あと、文化祭において、恋愛がらみの騒動に足を突っ込まないほうがいいですよ」

そんなもの文化祭じゃなくたって、関わりたくないね。恋愛がらみだって？間違はなくこじれるに決まっているじゃないか。とばかりを食らうのが目に見えている。

「この話は聞いたことがありますか？」

言って、話し始めたのは、紛れもなく文化祭の七不思議の話だった。

「文化祭で他人の恋愛事情に関わると、その後一生他人の恋愛に振り回される人生を歩むことになるらしいですよ。何でもその昔、友人の恋愛に面白半分に付き合っていたら、その友人から逆恨みを買って、卒業後もいろいろ迷惑をかけられた女子生徒がいたらしいです。その女子生徒は、ことあるごとに恋愛相談を受けては迷惑をことうむり、自分はまともに恋愛をできずに不運で不幸な人生を送ったそうです。死後、彼女はきっかけとなった文化祭に出没して、自分と同じ運命をたどる仲間を探しているんだとか」

「それは大変な話だが、そんな話をなぜ俺にするんだ？」

俺の意見としては、どちらかというとその毛があるのは岩崎のほうだと思っね。

「成瀬さんはお人好しのヘタレですから、真剣に頼まれたら断れないでしょう。だからその時の切り札にするといいですよ。断る言い訳にでも使ってください」

そんな紹介いらないぞ。それにしても、と思う。

「文化祭の七不思議は、人間関係、もっと言うと恋愛がらみの話が多いな」

ついにコンプリートしてしまった俺は、全部の話を思い出す。三原、日向、姫、そして岩崎。この四人から聞いた話は全て恋愛がらみで、天野の話はいじめの話。高校生とはいえ、人間関係の難しさはついて回るらしい。

「それだけみんな恋愛に苦労しているということです。特に恋する女子高生はすごいです。恋に命を懸けていると言っても過言ではないでしょう」

「恋に、命ねえ」

にわかに信じられないが、女子ならあるような気がする。俺たち男子とは思考回路が違う。優先順位など、違って当たり前なのかもしれない。

「なので、女子の恋愛事情は黒いですよ。女子間の恋愛事情はある程度筒抜けですから、当然ライバルも知っています。思い人が付き合っているなら、別れさせて寝取る、なんて当たり前ですよ」

「聞きたくない話だな」

恋愛は美しいもの。友情は永遠。と、心から信じているわけでは

ないが、こつもあからさまに公言されると、さすがにもの悲しさがある。恋愛に興味のない俺がこつなのだから、女子に夢や希望を抱いている一般男子どもはさぞかし心苦しい話だろう。

「ま、少し大げさに表現しているのは否めませんが、それでもきれいなものばかりでないのは本当です。七不思議を利用して、カップルを別れさせる、なんていう過激派の人たちもいますからね」

過激派、という派閥があるかどうかは置いて、七不思議を利用して？それはどうということだ？

「先ほども言いましたが、文化祭でケンカをすると……という話があるじゃないですか。あれを利用して、わざとカップルにケンカさせるんです。それも集団で仕組むんです。術中にはまったカップルはケンカしてしまう。文化祭中にケンカをすると、二度と復縁できない。愚かにも信じてしまった人たちは、自ら可能性を絶ってしまいうわけです。策士たちはその哀れな背中を優しくなでながら、こつうわけです。『かわいそうに。私だったらこんないい人、絶対に手放さないのにな』」

「そつやってまんまと寝取るわけか」

返事をせずになつくと、『ああ無情』とばかりに首を左右に振る。

「はつきり言つて信じがたい話だな。なぜ付き合っていた相手より、七不思議を信じるんだ？」

「人の心はそんなに強くできていないのですよ。人は不安に押しつぶされてしまいます。そんな時にもつともらしい話をされると、コロッと信じてしまつわけです」

岩崎の話は胡散臭かったし、俺ならばバカバカしいと吐き捨てると思うが、信じてしまうものもいるというのは、事実なのだ。

「成瀬さんも、恋する女子を敵に回さないほうがいいですよ。彼女たちは手段を選びません。下手に首を突っ込むとやけどじやすまない大けがを負いますよ。彼女たちにとつて、他人の不幸など、落ち葉みたいなものです。そこにあつたら掃いて捨てるだけなんですよ」

いったい何の話が分からなくなってしまっている。確か、恋する女子の話だったと思うが、岩崎の口ぶりだと過激派のテロリストのように聞こえてしまう。岩崎の話をまるっと信じると、恋する女子たちは前科の一つや二つは当たり前、人を殺めていてもおかしくない。ま、俺は全て信じるつもりはないが、多少は信じる。岩崎の話を多少信じると、一つの可能性が見えてくる。信じがたい話ではあるが、筋は通る。

「それで、あんたはどうなんだ？」

「はい？ どう、とはどういう意味なんだ？」

「あんたもよく自分のことを、恋する乙女、と称するだろう。あんたも前科の一つや二つはあるのか？」

「ぜ、前科なんてないですよ！ 私は他人を陥れてまで、幸せになりたいとは思いません。わ、私の好きな人も、そんなこと許すはずありませんから」

案外まともな答えが返ってきてほっとした。

「そうかい。そりゃよかった」

「それはそうと、成瀬さん」

唐突に話を変える岩崎。その表情は、先ほど以上に真剣だった。

「私に、何か言うことがありますか」

一体何の話かと思っただが、岩崎の目を見て思い当たる。

岩崎は何かを待っていた。その目は確信に満ちていた。おそらく、俺が今何か事件に巻き込まれていることを確信している。だが、それを言わずにいる。これが何を意味するか。

「言うこと、ねえ」

岩崎は今朝、何かあったら連絡してくれ、と言っていた。忙しいが、何か手伝えることがあるだろう、と言っていた。俺はそれに、必要があれば、と答えた。

岩崎は待っているのだ。俺が手伝ってくれ、助けてくれ、と頼むのを。おそらく、何かあった、と確信している。しかし、それを俺に言わないのは、俺の口から言うのを待っている。ならば、俺の言うべき言葉は決まっているだろう。

「ああ。何もないな。今日一日で特筆すべきことは何もない。麻生が財布を盗まれたぐらいだ」

「そう、ですか。麻生さんのおサイフは見つかったんですか？」

「ああ。すぐに見つかった。犯人も特定できている。捕まるのも時間の問題だ」

「そうですか。それはよかったです」

全然よくなさそうな顔で言うな。全く世話の焼けるやつだ。別にあんたを必要としないわけじゃないぞ。あんたの手を煩わせるほどのことでもないんだ。あんたはあんたの文化祭を楽しめばいい。

それだけなのだが、どうせ言っても聞きやしないだろう。仕方ない。結局俺が気を遣わなければいけないんだ。こうなることは分かっていたよ。

「そういえば、クラスの打ち上げは明日になったんだってな」

「え？ええ、みなさん疲れていると思いますし、どうせ明日も部活動はありませんので。それがどうかしましたか？」

「じゃあ今日の放課後は空いているわけだな」

「はい。ですから、それがどうか？」

「今日はうちに来い」

「え？」

「今日はTCCの打ち上げをしよう」

こうして、俺は身体を張るわけだ。なぜ俺がここまで身体を張らねばならないのだろうか。今回の文化祭で俺は人一倍頑張ったはずだ。今日だって他人のために奔走している。しかし、それでも他人はまだ俺を認めてくれないらしい。どう考えてもひどい話なのだが、偶然だろう。そう思わなければ、やっていけない。

「あんたは全員に連絡してくれ。誰を招集するは任せる」

「は、はい。あの、でもいいんですか？」

俺が言い出したのだ。いいに決まっている。

「覚悟はできているよ」

あんたがそんな顔じゃ、周りが心配するだろう。どうせ俺のせいにされるんだ。だから、これでいいんだ。おそろくな。

「分かりました。ありがとうございます。それと、すみません」

謝るくらいなら、もうしないでもらいたいね。

「あ、あの、成瀬君……」

俺と岩崎の間に微妙な空気が流れ始めたころ、ようやくプラネタリウムから戸塚姉妹が出てきた。

「お待たせしました」

そんなに待っていないぞ。そんな恐縮されると俺が困るし、他人からの視線が痛いから勘弁してくれ。

「戸塚さん、プラネタリウムはいかがでしたか？」

岩崎が戸塚結衣に話しかける。すると、

「ま、作り物、って感じだったね。文化祭にしては結構まとまとだったけど」

答えたのは彩衣のほうだった。どちらも戸塚さん、だからどちらが答えてもいいのだが、姉妹本当に似てないな。彩衣は前に出るタイプで、結衣は後ろに控えるタイプだ。どちらがいいとは言わないが、両極端と言えよう。

「そうですか。一応誉めてくださっているのですよね？」

「彩衣ちゃん、ダメだよ！」

苦笑する岩崎。戒める戸塚結衣。そんな二人をお構いなしに、彩衣は、

「ねえ、あなた誰？成瀬君の彼女？」

「わ、私ですか？彼女？」

おかしなくらい取り乱した岩崎を無視して、

「彼女じゃないぞ。ただの腐れ縁だ」

「く、腐れ縁とはなんですか！そもそも使い方が間違っています。腐れ縁とは、嫌々ながら続いてしまうような関係のことを意味する言葉です。たかだか二年同じクラスになっただけで使うような言葉ではありません！」

確かに使い方が間違っていたような気もするが、そこまで否定するということは、しつくりくる別の言葉があるのか？

「腐れ縁でなければ、何だ？」

「な、何だ、と言われましても……。私には決断しにくいと申しますか……」

何なんだ、いったい。俺は口ごもる岩崎を見て、頭に疑問符を浮かべるだけだったが、

「なるほど、そういう関係かぁ！」

一人得心の彩衣。俺と岩崎を交互に見ると、最後に姉を見て、

「いいね。結衣ちゃんの学校は楽しそうで！」

言われても、ピンとこない。何を見て、そう感じたのだろうか。この漫才みたいなやり取りでそう思ったなら、勘違いも甚だしいね。

「さて、そろそろ俺たちは行くぞ」

適当でくだらない話がひとしきり盛り上がったところで、俺は岩崎に向って終了宣言をする。あまりこうしていてもしょうがないし、プラネタリウムと展示に迷惑がかかる。

「そうですか。私もそろそろ次の仕事に向おうと思います」

「そうか。適当に頑張れよ」

「はい。成瀬さんも、頑張ってください」

俺が何を頑張るって？事件はもう解決していると言っているだろうが。

「戸塚さんも楽しんでください。文化祭は今日で終わりですからね。目いっぱい楽しむといいですよ！彩衣ちゃんもね」

「はい。岩崎さんもお仕事頑張ってね」

「ありがとう。岩崎さん」

こうして、俺たちは岩崎と別れた。

「あの、成瀬君。次はどこに？」

しばらく廊下を歩いていると、戸塚結衣が訪ねてきた。そういえば、まだ言っていなかったな。

「とりあえず麻生と連絡とって合流する」

「それから？」

「それから、」

発端が七不思議で、主人公が演劇部っていうのが、また面白いな。俺から見たら茶番でしかないんだが、それでも舞台は舞台だな。

「この陰謀劇を終わらせて、フィナーレを迎える」

16:30~17:00

麻生に連絡をすると、ちょうど最後のパフォーマンスが終わったところらしく、中庭に集合することになった。

「それで、捜査のほうはどうだった？何か分かったのか？」

まあある程度、俺は全貌がつかめている。相変わらず証拠はないが、実際に入らないだろう。目撃者でもいれば話は別だが、出てこないと考えるほうが現実的だ。それでも解決には問題ないし。とはいえ、もう少し確信できる材料がほしい。

「お前のほうはどうだ？独自に調査していたんだろう？」

あまり期待していないが、演劇部の人間なら、多少は情報を持っているかもしれない。

「俺のほうはとんでもない情報を手に入れているぞ」

「え？本当？」

「すごいじゃん、麻生！」

麻生の発言に、それぞれアクションを見せる戸塚姉妹。しかし、彩衣は麻生を呼び捨てなのか。俺は確か君付けだったな。俺のほうがやや格上ということか。いや、単に姉の呼び方を真似しているだけだろう。

「で、その情報って？」

「それは、演劇部一年の中で、俺が大人気ということだ」

「はあ？」

「はあ……」

麻生の発言に、それぞれリアクションを見せる戸塚姉妹。

「いやな、俺もびつくりなんだが、どうやら演劇部一年は俺の噂で持ち切りらしいんだ。いつのころから一年たちが俺の名前を出し、どんな人が知りたがり始めたらしく、俺の友人も何度も質問されたらしい」

「何その情報！今回のことと全く関係ないじゃん！」

「いや、待てよ。これは俺のファンが、俺の私物欲しさに起こした犯行ってことで間違いないだろう」

「ないよ！あんたはこのアイドルなのよ！年下が噂しているからって、浮かれすぎ！」

「浮かれているわけじゃなくて、冷静に考えてそれしかないだろう！」

とりあえず落ち着け、二人とも。冷静なら、もう少しちゃんと説明してくれ、麻生。そんなに頭ごなしに否定しなくてもいいじゃないか、彩衣。お前は関係ないんだから、おろおろするな、結衣。

「麻生、噂に心当たりはないんだな？」

「ないな。演劇部一年とはほとんど関わりがない」

「ほとんど、というと多少はかわりのあるやつがいるってことか？」

「ああ。お前覚えていないか？一年女子で、磯崎里美ってやつがいるんだけど」

一応形だけでも考えてみる。しかし、心当たりなどあるはずもない。

「誰だ？」

「俺たちと同じ中学出身で、中学時代に多少接点があったんだ」

俺は知らないな。お前が年下の女子とよろしくやっていたとは。こいつの行動を逐一把握するような趣味はないので、当然と言えば当然だ。

「接点っていうのは？」

「委員会だな。三年のとき、無理矢理クラス委員をやらされたんだが、そのとき磯崎と知り合ったんだ。でも委員会の時しか話していないし、高校に入ってから全く交流はない。知り合いというよりは、ただの顔見知りだな」

なるほど。こいつは本当に対人関係に強いな。委員会で一緒になったからと言って、すぐさま知り合いになどなれるものか。別段年下女子と知り合いになりたいわけではないが、すぐさま他人と打ち解けられることは素直にうらやましいと思う。

「それで、噂はどんなものだ？もう少し詳しく教えてくれ」

俺が言うと、

「ちょっと、成瀬君」

彩衣が間に入ってくる。

「この話、サイフ二重窃盗事件に関係あるわけ？麻生の妄想じゃないの」

「何で俺がそんな悲しい妄想を語らなきゃいけないーんだよ」

その可能性は否定できないが、おそらく、

「事件に直結していると思う。麻生のサイフが盗まれた。そのサイフが演劇部の行く舞台の舞台所で発見された。その演劇部の一年の中で、麻生の噂が飛び交っている。正直、偶然が重なりすぎている。偶然が重なりすぎると、それは、」

「誰かの意図が介在している可能性が高い、てこと？」
「その通りだ」

俺はほぼ確信しているのだが、いまいち信じがたい事実なので、慎重に事を進めようとして麻生から情報を得ているのだ。さて、麻生。教えてくれ。

「麻生に対する噂があつたのは分かった。今日に限って言えばどうだ？何か聞いたか？」

「ああ。今日は演劇部の一年女子がこそ何かしていた、と言っていたな。今日は一年だけの舞台があるから、緊張しているんだろう、ってそのままそつとしておいたらしい」

「じゃあ今日の昼一の舞台は、一年だけでやっていたのか？」
「そうらしい」

では彩衣が拾ったのは、間違いなく一年の落とし物だろう。さて、そろそろいいか。ほしい情報は見事にそろった。物的証拠でもあれば嬉しいが、そんなもの一高校生である俺たちが探せるはずがないし、見つけたとしても使えないだろう。では、

「決まりだな。演劇部の一年女子を呼び出せ」
「待ってくれ、成瀬」

この期に及んで何だ。というか、なんだその顔は。

「待つてほしい。もう少し考える時間をくれ」

考える時間？意味が分からないぞ。お前が何を考えるというんだ。そして、その身を裂かれるような苦しい表情はなんだ。

「どういう意味だ？」

「だって、彼女たちは俺の私物がほしかったのだろう。使用するためではなく、コレクションとして」

「はあ？」

「おそらく彼女たちにとって、俺は神にも似た遠い存在。そんな俺に、直接声をかけることなどできない。しかし、俺に近づきたい。そう考えると、俺の私物、それも身体の一部とも呼べるほどの大切なモノがほしかったのだろう。そんな彼女たちの心情を思うと……」

身を裂かれるような悲痛な表情は、そのまま悲痛な言葉となって表れた。それは麻生を思う彼女たちの叫びのほず。しかし今は、麻生の叫びそのものになっている。麻生、お前そこまで……。

「麻生君……」

思いが言葉となり、言葉が思いとなる。そして、思いは伝播する。彼女たちの思いが麻生に届き、麻生の叫びが戸塚結衣に届く。戸塚はちらりと俺のほうを見た。そして、唇をかみしめると、瞳に涙を浮かべる。おそらく、その悲痛な思いに心当たりがあるのだろう。妹の話では、結衣にも思い人がいるらしい。思い人のことを思う。その気持ちたちが痛いほど分かるのだろう。

「……………」

戸塚妹、彩衣も先ほどとは打って変わって、黙り込んでいる。姉

とは違って、この思いが分かるわけではないようだが、この空気に飲まれてしまっているようだ。戸惑い。その感情がありありと表情に浮かんでいる。どうしていいのか、何を考えればいいのか。麻生に向けて、どんな言葉をかければいいのか。悩んでいるようであり、気づいているようでもある。

そして俺は……。

「妄想もいい加減にしろ」

「は？」

「ええ？もうそう？」

何を考えているんだか。演劇部の一年女子が全員麻生に恋をするわけないだろう。ファンになるなんて言語道断だ。私物？コレクション？これほど頭のおかしい奴だとは思わなかった。妄想というか、むしろ病気に近いな。

「え？成瀬君、どういうこと？」

「どういうことも何も、全部麻生の冗談だろ。でなきゃ茶番だ、笑劇だ、小芝居だ」

「ええっ！」

育ちがいいのか、それとも人を信じやすいのか。戸塚結衣は本当に騙されていたようだ。

「何だ、やっぱり冗談なのか。なんか麻生もやけに真剣だし、成瀬君も突っ込まないし。この空気がよく分からなかったんだよね。でも、冗談でよかった」

「戸塚妹は気づいていたのかよ。最後まで演じちゃった俺がバカみたいじゃないか。でも、戸塚姉は信じてくれていたみたいだし、ま

あいいか」

くだらないことに時間を費やしてしまったら。文化祭はもう終わりだ。一般客は十七時半には学校から出ていかなければならないし、時間がないのだ。無駄な時間を取らせるな。

「それで、成瀬。犯人は誰なんだ？どんな目的のためにこんなことをしたんだ」

「動機も犯人もだいたい目星はついていますが、証拠はないし、自信もあまりない。行つて、犯人に自首してもらおう。話はその時に聞けばいい」

「自首？そんなことできるのか？証拠もないのに？」

「ああ」

俺はこともなげに言つてやった。おそらく自ら名乗り出ざるを得ないだろう。そういう状況を作ることが可能だ。

「とりあえず、演劇部の一年女子を全員集めてくれ。場所は、そうだな、連中の活動場所でもいいだろう」

「分かった。演劇部の連中には適当な理由をつけて、お願いしてみるよ」

サイフの話をすれば、連中は集まってくれるはず。少なくとも、犯人は来るだろうな。

キーワードは、恋する乙女と文化祭の七不思議だ。

17:00~17:30

「いい加減、教えてくれてもいいだろう。俺は被害者だぞ」

演劇部一年女子を集めることに成功した俺たちは、演劇部の活動拠点である体育館に向かっていた。とはいえ、体育館でそんな怪しげな集まりをすることはできないし、すでに片付けが始まっているかもしれない。正確な場所は、演劇部の部室。それも着替える場所ではなく、演目や配役に関する話し合いを行う、いわば会議室のようなところだ。

「犯人については心当たりがあるだろう。勘でも何でもいい。話の流れから、おそらくこいつだろう、という人物がいるだろう」

「というと、磯崎里美か？」

「ご明察」

「本当かよ」

信じられないのも無理はない。ほとんど関わりがないやつだというのは、本当なのだろう。そんなやつが窃盗のターゲットになってしまったのだから。それでも磯崎里美が一番疑わしいという事実には変わらない。

「磯崎が俺のサイフを盗んだのか？何の目的で？」

「……………」

それがあまり言いたくないのだが……。言わざるを得ないだろう。俺とて、本当にこんなことがあるのかと、疑っているのだ。

「何だよ、そんなに言い難いことなのか？」

麻生の表情が変わる。俺が躊躇ったことで、ただ事ではない、と考えたらしい。ただ事でないのは間違いない。しかし、真面目な意味ではない。要するにふざけた事態であるということだ。

なぜだか麻生は緊張し、その空気につられたのか、戸塚姉妹もやや張りつめた空気を発している。俺も緊張してしまうね。この空気の中で、くだらない発言をするのは勇気がいる。俺だって言いたくはない。言いたくないから、濁すことにしよう。

「ぶっちゃけてしまうと、麻生の語った妄想話と似たようなものだ」

「は？」

「えっ！」

「はあ？」

三人ともとりあえず驚愕のリアクションをくれた。驚いてくれて嬉しい。だから言いたくなかったのだ。

「ちょっと成瀬君！どういうこと？」

なんでお前がそんなに食いついてくるのか、俺には分からない。

「俺の妄想話、ってさっき言った俺のファンがどうのここのってやつだよな？それと似たような話だと？さっぱり理解出来ん」

信じられないのも、理解できないのも同感だ。俺とてそうだ。だからこれ以上は本人に聞いてみようじゃないか。これから本人に会いに行くのだ、俺から中途半端な話を聞くより、そっちのほうが簡単だし、説得力もあるだろう。

「もう答えは目の前だ。俺だって信じていないし、証拠もない。だったら本人に直接聞いてみよう。それが一番簡単だ」

とりあえず早いところ案内してくれ。俺はその演劇部の活動拠点とやらを存じていないのだ。そこに行けば、全てが分かる。俺が解決してやると断言してやる。というか、もうこんな茶番に付き合いたくない。何が七不思議だ、恋する乙女だ。

それからあまり無駄口を叩かずに黙々と歩き、ついにたどり着く。そこは文化祭中とは思えないほど人気のない場所で、怪しい会談をするにはふさわしい場所だった。

麻生が扉を叩く。すると、中から女子生徒が顔を出す。

「あー、あのさっき連絡した者なんだけど、」

言っと、対応した女子生徒はやや緊張した面持ちで、

「どうぞ」

と言って、中に通してくれた。目的不明の来訪者を招き入れた、というより、警察を招き入れた犯人の知人、という感じだった。

女子生徒に続いて中に入ると、演劇部一年女子が全員立ったまま待ち構えていた。全員戦闘態勢、といった感じだった。

「いったい何の用です？まだ文化祭は終わっていないというのに」
いきなりケンカ腰だった。麻生は俺を見、目で訴えてくる。俺に説明しろ、ということだろう。

「ここにいる麻生が、財布を盗まれてな」

「それは御愁傷様です。それが何か？」

応対する女子生徒の声は、ことごとく冷めている。それは何かを拒むように。私たちは関係ないと叫ぶように。

「それが、体育館の舞台そでで見つかったんだ。あんたたちが舞台とやっていた時に、だ」

「えっ？」

その驚きは何を指しているのか。解答を導き出すために、さらに踏み込む必要がある。正直言って、やることは変わらない。俺の考えが当たっていたところで誰も不幸にならないし、外れたところで俺は何も失わない。代価も支払わない。何も変わらない。なので、躊躇なく踏み込んでやる。

「結論から言うと、俺はこの中に麻生のサイフを盗んだ犯人がいると考えている」

「……………」

空気が変わった。だが、ざわついたりしない。今度の俺の発言には驚きはないようだ。おそらく覚悟はできていたのだろう。この空気の变化は、俺に対する敵対心のスイッチが入ったということだろう。

「素直に名乗り出てくれれば、悪いようにはしない。面倒は嫌いなんだ。ここで名乗り出てくれないか」

ま、素直に名乗り出てくれなくても、悪いようにはしないが。

「もうサイフは返ってきている。麻生も特に恨んではない。すでに事件は解決していると言ってもいい。もう罪は追及しないと約束する。頼む、名乗り出してくれ」

「何を根拠に私たちの中に犯人がいると言っているんですか？ 私たちは知りません。それに、事件が解決しているというなら、なぜこんなところに来て探偵の真似事なんてやっているんですか？ 面倒事が嫌いなら、こんなこと止めればいいのに」

俺だってやりたくてやっているわけじゃないんだが。俺が苦労しているのに、誰も労ってくれない。悲しくなってくるな。

「なぜあんたが、誰も知らない、と断言できる。もしかしたら、この中の一人くらい何か知っている奴がいるかもしれないだろう」

「そ、それは……」

別に揚げ足を取りたいわけでも、追い詰めたいわけでもない。ただ、名乗り出てくれれば、少しだけ手助けをして、あとは好きにすればいい。

「どうしても名乗り出てくれないのか」

「え、ええ。だって本当に私たちは……」

まあ、いい。おそらくここにいる全員はグルだろう。事情は知っているはず。ならば、ここで謎解きを開始しても構わないだろう。ま、向こうが何も言ってくれないのだ。俺としてはこうするしかない。

俺はサイフを取り出す。

「悪いが強硬手段を取らせてもらつ。悪く思つなよ」

取り出したサイフを隣にいた戸塚結衣、は止めて、戸塚彩衣に渡す。

「ん？何これ」

「麻生に渡してくれ」

「何であたしが？」

「よろしく頼む。あんたから渡すのが一番なんだよ」

「よく分からないけど……」

意味は分からずとも、事の必要性は分かってくれたようで、彩衣は麻生に向かって一歩踏み出すと、

「はい、これ」

サイフを差し出した。

「お、おう。サンキュー」

事情を把握しきれていない麻生も、納得できないながらも礼を言つてサイフを受け取るうとした。そして、

「止めて！」

女子十余人のユニゾンが部屋の中に鳴り響く。強い拒絶。その声の大きさ、迫力に麻生も彩衣も思わず固まってしまふ。何が起つたのか、分からないのだらう。驚きは、一瞬の空白を生む。

「ご苦労さん」

俺は再び麻生と彩衣が動き出す前に、サイフを横からかつさらった。これで、全てが明らかになった。

「言っておくが、俺だってこんな強硬手段は取りたくなかったんだ。素直に言ってくればよかったのに」

「……………」

「何？どういうこと？」

サイフを持っていたその形で固まっている彩衣は改めて疑問を呈した。

「ここでも言ってもいいのか？」

俺が連中に問いかけると、自然と一人の女子に視線が集まる。そいつは紛れもなく磯崎里美だった。これでやつが首謀者であることが明確になったな。

「……………」

しばらく放心したように固まっていた磯崎里美だったが、決意を固めたように顔を上げると、麻生の顔をじつと見た。そして、

「みなさんに迷惑をかけたのは事実ですから、ここで構いません」

一気に立ち直ったようだ。強いね。

「だから、どういうこと？磯崎が俺の財布を盗ったってこと？」

「誰が盗ったかは知らないが、この中の誰かがやったことは間違いないだろうな」

「え？首謀者はあの子なんじゃないの？」

首謀者は磯崎里美で間違いない。しかし、実行犯が彼女とは限らない。見れば分かるだろうが、ここにいる連中は全員事情を知っている。なぜ磯崎里美がこんなことをやろうとしたのか。理由を知って、協力しているのだ。

「事情を説明してやってくれ。俺も細部まで分かっただけじゃないんだ」

俺が磯崎里美に言うと、

「はい」

力強くうなずいた。さて、これで俺の役目も終わりだろう。と思っただが、

「麻生先輩！ずっと好きでした！私と付き合ってください！」

「は？」

「ええっ！」

「はあ……」

最後のため息じみた発言は俺の物だ。これでは何も分からないだろう。一から説明してやれよ。

「い、いや……」

「だ、ダメでしょうか……？」

「いや、ダメとかそういうんじゃない……。おい、成瀬！」

わめくな。なぜ俺にどなる。説明不十分なのは磯崎で間違いないだろう。俺は何も悪くないぞ。

「な、成瀬。説明してくれ。こりやどういうことだ？何かのドッキリか？」

「落ち着け。お前なんかドッキリ企画で嵌めても何も面白くない。それに、そんな企画に俺が付き合うわけないだろう」

「そ、そうか。じゃあどういうことだ？」

「ここに来る前、話だろう。お前の妄想じみた話とあまり変わらない」と

混乱して、すっかり忘れてしまったのだろうか。俺は話したくなかった。しかし、磯崎里美が熱に浮かれてしまっているの、こうなったら俺が説明するしかない。もう破れかぶれだ。どうにでもなれ！

「磯崎里美はお前に恋心を抱いている。それがこの事件の発端だ」「いや、待て。どこの世界に好きな人のサイフを盗む手癖の悪い女子高生がいる？話が最初から見えてこないぞ」

徐々にヒートアップしてくる麻生。何度も言うが、落ち着け。

「わめくな。話を最後まで聞け」

このつまらない話を俺がしなければいけないこの状況を恨みながら、俺は事件の全貌を話し始めた。

「お前と磯崎は中学で出会ってそこそこ仲良くなったが、高校ではほとんど接点がない。そう言ったのは、お前だな」

「ああ。事実だ。高校に入ってから会話した覚えがない」

すでに恋心を抱いていた磯崎は、近づきたいのに近づけないこの

状況に焦りを感じていた。話したい。でもきつかけがない。きつかけや機会がないと話しかけることができない。話しかけなければ、この恋は始まる前に終わってしまう。高校に入学してからもう半年経過した。しかし、未だ一言も話せていない。焦っていた磯崎の耳に、魔法の言葉が届く。

「それが、『文化祭の七不思議』だ」

文化祭の七不思議の中には、恋愛に関するものが数多く存在する。この中のどれかを実行すれば、麻生と親密になれる。あわよくば恋人になることができる。そう考えた磯崎は、おそらく必死に調べただろう。自分が実施可能で、望みをかなえることができるであろう、この都市伝説を。

「しかし、自分の望みと現実に行うことができる内容がかみ合わなかった」

そこで思い付いたのが、七不思議の曲解。こじつけとも呼べる、今回の犯罪行為じみた恋を成就させるための作戦だ。

「麻生、こんな話を知っているか？」

「あ？何だ？」

「文化祭の最中に大事な物を失くした人に、その失くした物を届けたいと、とても親密になれる」

「いや……。で、それがどうかしたのか？」

「今回の事件で、戸塚妹がサイフを拾わなかったら、どういう結末を迎えていたと思う？」

「何が言いたいのか、分からねえよ。はっきり言ってくれ」

こいつは自分で考えるということしないのか。少しは頭を使ってもらいたいね。これ以上俺の手を煩わせないでくれ。

「戸塚妹が持っていなかったら、お前のサイフは、誰が持っている？」

「きつと磯崎さんだね」

答えたのは麻生ではなく、彩衣だった。

「その通り。で、麻生は大切なサイフを失くしていた。で、そのサイフを届けたのが、磯崎。すると二人はどうなるんだ？」

「親密になれるんだね！」

つまり、この七不思議が成り立つ状況を無理矢理作り出し、七不思議が成立するよう仕組んだわけだ。盗んだサイフでは効力はないかもしれない。そうなると意味がないので、誰かに協力を要請したかもしれない。恋する気持ちが分かっているなら、おそらく躊躇いなく協力してくれたに違いない。だからここにいる全員が、この事件のことを知っているのだと思う。そして、戸塚妹が麻生にサイフを手渡そうとしたとき、全員が『止めて』と叫んだのも、そういう理由だろう。姫曰く、拾った人ではなく、届けた人と親密になってしまうらしいからな。

「それで、あっているよな？」

「うん」

同意を求めた相手、磯崎里美は麻生を見つめたまま頷く。

「他に聞きたいことは？」

麻生に聞くと、

「ねえよ」

こちら俺のほうは見ずに返事を返す。

これでようやく本当にお役御免だ。俺は教室に戻らせてもらっぜ。

「あとは好きにすればいい。俺は帰る。行くぞ、戸塚」

「あ、はい！」

「戸塚妹は帰れ。そろそろ門が閉まる時間だ」

「うーん、もう少し見ていたかったけど、こればかりは仕方ないね」

俺は戸塚姉妹を引き連れて、演劇部の部室を後にした。これで何が変わるのか。そんなことは分からないが、俺の中でこの事件は終焉を迎えた。これは間違いない。

さて。次はフィナーレを迎えたこの物語は、ハッピーエンドなのか、それとも……。どちらだとしても、俺のような端役には関係ないね。願わくば、主役の二人に優しい物語であってもらいたい。でなければ、俺の奮闘がむなしなものになってしまうからな。

「あの、成瀬君」

「何だ？」

彩衣と別れて教室に向かうまでの道中、戸塚が躊躇いがちに声をかけてきた。

「さっきの話だけど、」

何だ？俺はもう忘れてしまいたいのだが。

「あのと、麻生君のおサイフ、私に渡そうとして、途中で彩衣ちゃんに変えたよね」

よく分かったな。

「あれ、何で？」

「万が一、連中が止める前に麻生が受け取ってしまうことも考えてな」

あれはタイミングの問題だ。麻生が勢いよく、サイフを取ってしまっただけで止める間もない。

「それって、私と麻生君が親密になると困るってこと？あ、麻生君が私のこと嫌いとか？」

自虐的なことを言うな。あんたは嫌われるような人間じゃないし、麻生と仲良くしてもらいたいとかもらいたくないとか、どっちでもいい。それに関しては、二人で話し合ってくれ。

「どちらでもない。あんた、好きな人いるんだろ？」

「ええっ！何で？」

何で、と言われてもな。彩衣との会話とか、要所要所で垣間見ることができた。で、それは麻生ではない、ということも分かった。

「あんたはあの七不思議を知っていたし、麻生と親密になっちゃったと分かったら、嫌な思いをするんじゃないかな、と思ってな。戸塚妹に好きな人がいるか分からないが、あいつはうちの生徒じゃないし。七不思議も効力外だろう」

何度も言うが、俺は七不思議を信じていない。なので、誰が渡そうとも、別にそれだけで親密になるとか、まるで信じていない。だが、信じている奴もいる。戸塚は信じてしまいそうだと思った。その点彩衣は、おそらく都合の悪い七不思議は信じないだろう。占いの時にそんなことを言っていたし、こんなことでグダグダ悩むような性格ではない。

ちなみにうちの生徒じゃないから効力外、という制限はない。というか知らない。あれは俺のオリジナルだ。悪い言い方をしてしまえば、嘘ということになる。だが、これを言わないと、彩衣を蔑ろにした、ということになってしまう。そうなると、戸塚はいい思いをしないだろう。結局麻生の手に渡る前に制止したわけだし、渡っていたとしても、それだけで親密になれるわけもない。だからこの嘘は、誰にも優しい嘘なのだ。さて、自分に対する言い訳はこのくらいで十分だろう。

しばらく黙り込んでいた戸塚だったが、突然顔を上げ、

「磯崎さん、すごいですよね」

「ああ」

『すごい』の意味にもよるが、すごいことは間違いない。岩崎の言う、『恋する乙女』のパワーは計り知れないな。いい意味でも、悪い意味でも。

「私も、頑張らないと」

俺に言ったのか、それとも独り言だったのか。どちらにしても戸塚の覚悟めいた感情を感じ取ることができた。何をどう頑張るのか

知らないが、犯罪は止めてくれよ。まあ、俺に火の粉が飛んでこなければ、それはそれで構わないのだが。

17:30~18:30(前書き)

これで最終話です。

今回はあとがきまで読んでください。

よろしく願いいたします。

17:30〜18:30

教室に戻ると、クラスメートが片づけを始めていた。明日月曜日は終日、片づけの時間に充てられている。しかし、貴重品や生もの、壊れやすいもの、いたずらされそうなものは今日中にある程度片付けてしまうことになっている。完全に遅れてしまった俺と戸塚だったが、特別文句も言われず、そのまま片付けに合流した。

片づけはそんなに真剣なものではなく、適当に私語を盛り上げながらやっていた。俺も、その一人である。

「こんな時間まで戸塚さんと二人で何をしていたんですか？」

「ただの野暮用だ」

「男女二人の野暮用なんて、ずいぶん青春らしい野暮用ですね。うらやましいです」

嫌味が口から止まらないこの女は、紹介するまでもないだろう。当然、岩崎である。

「うらやましいのも青春らしいのも、別にいる。俺と戸塚はただのオーディエンスだ」

「どうせ観客参加型だったでしょう」

どうしたらここまで嫌味が言えるのだろうか。ある意味才能を感じさせるが、俺としてはこの才能を別のところで発揮してもらいたいね。さらに嘆くべきところは、この女が嫌味の天才であることを知っている人間があまりに少ないということだ。なぜ俺にだけ、こうも嫌味を言うのか。

「そういつあんたはどうなんだ？青春らしい何かはあったのか？」
「え？私ですか？あったと言えばありましたが、考えてみればいつもどおりでしたね」

それはいつも青春じみた何かがあるということか。うらやましいね。しかし、

「あんたって好きな人がいるような発言をする割に、俺以外の男子と二人でいることあまりないよな。努力しているのか？」

言つと、岩崎の動きが止まった。これは、嫌な予感がするな……。

「努力しているのか、と言いましたか……」

ああ、しまった。変なスイッチを押してしまったようだ。

「努力してますよ！しているに決まっているじゃないですか！成瀬さんは私が努力しない人間だと思っていたのですか？」

「いや、あんたは努力家だ」

「ええ、そうです。私は凡人なので、努力しないと成瀬さんみたいになれませんよ！」

「分かったから、落ち着いてくれ」

「俺以外の男子と、ですって？そこまで気づいていて、何で私の気持ちに気づいてくださらないんですか？」

何かもうよく分からなくなってしまったな。俺についての愚痴なのか。その思い人についての愚痴なのか。まあ最近いろいろあったからな。岩崎もストレスがたまっているのだろう。俺もストレスがかなり溜まっているのだが、地雷を踏んでしまったのは間違いない。ここは俺が大人の対応をするしかない。俺はいつになったらわがま

まに行動していいのだろうか。俺は誰に愚痴ればいいんだ？

「あの、成瀬君」

呼ばれて振り返る。そいつは戸塚だった。俺は、天の助け、とばかりに手を止めると、戸塚の下に向かった。

「何だ？」

「麻生君が呼んでいます」

ああ、そういうことか。もう俺は興味ないんだが、一応報告に来てくれたということか。変なところで律儀なやつだな。

俺は麻生のほうへ足を向けた。そこで気づく。

「戸塚、あんたは来ないのか？」

「え？私もいいの？」

おそらくさっきの話だろうから、一応あんたも関係者だ。俺以上に結末を気にしていたからな。麻生だって、怒りはしないだろう。

「興味があるなら来いよ」

「う、うん」

後ろで岩崎が何か呪詛的な言葉を吐いているような気がした。

「いやー、さっきは迷惑かけたな」

さつきはというか、今日は一日中お前の世話に追われていたんだが。

「それで、磯崎とのことだけど、」

その話も、もう俺の中では終わっているんだけどな。話したいというなら聞いてやってもいいが。戸塚はもちろんそのつもりだろうし。

「いきなり付き合うのは、俺には無理だから、もう少しお互い知りあつて、それから判断しようということになった。俗にいう友達から、つてやつだ」
「いいんじゃないか」

お互いの妥協点を考えると、それが妥当だろう。もし、結局麻生が断るようなことになれば、磯崎のほうは気を持たされただけ、ということになってしまつが、それはお互い様だし、そんなことを考えていたら、まともに恋愛なんてできないだろう。

「戸塚さんもごめんね。今日はいろいろ迷惑かけた」

「ううん。私のことは気にしないで。どうせやることもなかったし、暇だったから」

「そつか。実のところ、戸塚さんに対してはあまり悪いと思つてないんだ。むしろ感謝してもらいたいくらいだね」

何て無礼なことを言つんだ。確かに戸塚は何もしていないが、お前のせいで今日一日振り回されたんだぞ。そもそもこの件に関して、麻生が感謝されることなんて何一つないはずだ。

しかし、こう思つたのは俺だけだったようだ。

「う、うん。ありがとう」

一度驚いた顔をした戸塚だったが、その後頬を赤らめて俯くと、麻生に礼を言った。意味が分からんにもほどがある。というか、もう今日は頭を使いたくない。これ以上意味不明なやり取りは止めてもらいたい。

「報告は以上か？」

「ああ。片づけの最中に悪かったな。一応伝えておこうと思って」「気にするな。あとはお前の勝手だから、好きにやってくれ」

「ああ。今日はありがとな」

手を振ると、さわやかな感じで自分のクラスに戻っていった。あいつは本当に高校生活を満喫しているな。うらやましい反面、大変だな、と思う。

放課後、俺は校門の前で待ちぼうけを食らっていた。なぜそんなところで待たなければいけなかったのか。それは岩崎たちと連れ立って、ここまでやってきたのだが、

「あ、視聴覚室のカギを返し忘れていました。みなさん、申し訳ありませんが、ここで少しだけ待っていてくれませんか？」

「あー、あたしもプラネタリウムの機材忘れた。あれ、一応結構な値段するし、なくしたり壊されたりすると学校に迷惑だから今日持つて帰らないと」

「俺も手伝おうか？」

「あ、うん。よろしく」

というわけで俺は校門にいる。岩崎、真嶋、麻生が回れ右して校舎に戻っていた。しかし、ここで待ちぼうけしているのは俺一人ではない。

「あんたたちはもう帰ってもいいんだぞ」

「あ、でも一緒にここまで出てきたし、岩崎さんに一言声かけないと」

どこまでもまじめなやつだな。一人目、戸塚結衣。戸塚の言うとおり、教室からここまで一緒にやってきた。

「あたしは結衣ちゃんと一緒に帰るし」

なぜまだいるんだ。二人目、戸塚彩衣。どうやら姉を待っていたらしい。近くのコンビニで立ち読みをしていたとか。コンビニに一時時間もいる奴があるか。迷惑にもほどがあるな。

「じゃあ私はお言葉に甘えて、帰ります。また明日！」

そうしろ。ここで待っている意味はないからな。三人目、三原美聡。これだけの大所帯で教室を後にしたのは初めてだったが、今では二人しかない。まだ校門なのにな。

「あの、成瀬君」

相変わらずの遠慮がちな声で話しかけてきた。しかし、今朝までのおっかなびつくりと言った感じではない。

「今日は一日お疲れ様でした。私と彩衣ちゃんもいろいろ迷惑をかけてしまって……。成瀬君には本当に迷惑ばかり……」

戸塚に迷惑をかけられた覚えはないな。彩衣は性格上、多少迷惑に感じなかったこともないが、彩衣の場合悪意からじゃないし、元気がいい証拠だろう。俺はその程度でイライラするほど、アグレッシブじゃないぞ。

「あの、こんな話知っていますか？」

このフレーズ……。嫌な予感がするな。

「文化祭で誰かを幸せにした人は、今後の人生がとても幸せになるらしいよ。何でもその昔、周りの人のために自分を犠牲にして文化祭を盛り上げた生徒がいたんだけど、自身は全く文化祭を満喫できなかったんだって。でもそのおかげで、みんなから頼られ、好かれるクラスの人気者になったんだって。みんなに幸せを与えたその生徒を見ていた神様が、代々文化祭で周りの人を幸せにした生徒に、もっと多くの幸せを上げようと決めたらしいよ」

恐ろしく盛大な話だな。霊ではなく、とうとう神が出てきてしまったよ。うちの文化祭のために、神が毎年時間を割いて下さるとは、出世したな、うちの高校も。

「成瀬君は今日、麻生君と磯崎さん、二人を幸せにしたから、人の二倍は幸せになれるよ！わ、私も今日はすごく楽しかったし、彩衣ちゃんも楽しかったでしょ？だから、成瀬君はきつと幸せになれるよ！」

何故だか必死にいろいろ言ってくれる戸塚。今日、俺が頑張った

ということを評価してくれているのだろう。麻生や磯崎はともかく、戸塚の感謝の言葉は本音だろう。しかし、残念だな。俺は占いも七不思議も霊も神も信じていないんだ。労ってくれるのはありがたいが、慰めにしかないな。加えて、

「悪いな戸塚」

「え？何が？」

「今の話は、俺にとって八つ目の七不思議だ」

「え？ええっ！」

七不思議と名付けているなら、何とか情報操作して、七つにするべきだったな。どんなに質が悪くとも、そこは徹底させるべきだった。これ以上ないくらい、くだらない状況になってしまふ。これでは信じたくても、信じられないからな。ただ、

「ただ、八つの七不思議の中で、今あんたが教えてくれたやつが一番信じたい内容だった。教えてくれて、ありがとな」

「あ、いえ、そんな……」

他人を幸せにしたから、自分も幸せになれる、か。あり得ないほど幼稚で浅はかな内容だが、事実であつてもいいような気がする。そんな甘くて優しい内容の願いが届いても、罰は当たらないんじゃないだろうか。ここに来て、俺は都合のいい願望ばかりの七不思議に共感できた。今更過ぎる。しかし、この気持ちの変化は気持ちの悪いことではない。そんな気持ちにさせてくれた戸塚には心から感謝しよう。

「そろそろ本当に帰れ。グダグダしていると、三分の二以上になつてしまふぞ」

「え？」

ま、これは冗談だ。今日俺は十時間ほど学校にいるが、その三分の二、というと四百分。時間にして、六時間四十分。確かに今日戸塚とはかなり長い時間一緒にいたが、せいぜい六時間前後だろう。

「三分の二って何のこと？」

俯いて固まってしまった姉の代わりに妹が返事をよこす。俺が例の七不思議の話を適当にしてやると、

「ふーん」

と適当に頷いた。その後、ぶつぶつ言い始めたのだが、おそらく時間を計算していたのだろうと思う。

「わ、分かりました。今日はこれで帰ります」

俯いたまま返事をよこす戸塚は、傍から見てもかわいそうに見えた。俺から見てもそう見えるのだ。下校する他の生徒が見たら、どう思うか。考えただけでも恐ろしい。

「ああ、気を付けて帰れよ」

「あ、あの！」

俺の言葉が言い終わらないうちに、戸塚は大きな声を出して、顔を上げた。それはもうすごい勢いで顔を上げた。おそらくマンガとか小説なら『ガバツ！』という効果音が付くくらいの勢いだ。

「成瀬君と一緒に文化祭を過ごすことができて、本当に嬉しかったです！し、失礼します！」

今度はすごい勢いで回れ右して、帰って行った。戸塚姉の勢いに押された俺と妹は顔を見合わせた。耐え切れなくなったのか、彩衣が嘔き出すように笑う。

「あはは。じゃああたしも帰るね。あんな姉だけど、これからもよろしくね！」

「ああ。お前も気を付けて帰れよ」

俺が手を上げると、彩衣も手を上げ、姉を追いかけるように歩き出した。のだが、すぐに戻ってきた。

「どうかしたのか？」

聞くと、その質問には答えずに、

「演劇部の部室での成瀬君はかつこよかったよ！」

言つて、今度こそ姉を追って走り出した。全く何を言い出すかと思えば。軽々しく男に向つて、『かつこいい』とか言わないほうがいいぞ。男は阿呆ばかりだからな。勘違いするやつが出てくるはずだ。俺は間違つても勘違いしていないけどな。

その後、すぐに岩崎が帰ってきて、続いて姫と鉢合わせ、最後に麻生と真嶋が登場した。真嶋は家から車を呼び、プラネタリウムの機材を車に託すと、全員一緒に俺の家に向かった。文化祭の最中はほとんど一緒にいなかったわけなのだが、一応ＴＣＣとして初めて参加した文化祭だったからな。打ち上げはある程度盛り上がり、これで文化祭は本当に終了した。

「ねえ、結衣ちゃん」

「ん？何？」

「結衣ちゃんの好きな人って、成瀬君でしょ？」

「あ、やっぱり分かっちゃった？」

「うん。イチコロで分かるよ。そんな結衣ちゃんに朗報」

「ん？朗報？」

「そう。成瀬君が言っていた七不思議あるじゃない？三分の二以上一緒にいると、ってやつ」

「うん。あれがどうしたの？」

「あれって、一緒にいるだけでいいんですよ。話したり手をつないだりしなくていいんですよ？」

「うん、そうだと思うよ。だって、手をつなぐなんてとてもじゃないけど……」

「じゃあ、ホームルームの時間とか片づけとか準備とか、ゼーんぶ合わせれば、三分の二行くんじゃないの？」

「え？あ！ほ、本当だ！」

「よかったね！結衣ちゃん」

「うん、教えてくれてありがとう。彩衣ちゃん」

「どういたしまして。でもね、結衣ちゃん」

「ん？」

「実は、あたしも成瀬君と三分の二以上一緒にいたんだよ」

「え？もしかして、彩衣ちゃんあなたも！」

「冗談だよ、冗談！」

「ほ、本当に？」

「うん。で、話は変わるけど、あたしこの高校受かったら、TCCに入ろうかな、って思っているんだ！」

「彩衣ちゃん、もしかしてそれって話変わってくない？」

「だって、楽しそうじゃない？麻生とか岩崎さんとか、あと泉さんとか。みんないい人ばかりだし！もちろん成瀬君もいるし」
「やっぱり変わってないじゃない！ちよっと、彩衣ちゃん？待ちなさい！」

あとがき（前書き）

今話はただのあとがきになります。
興味がない方は回れ右することをお勧めします。

あとがき

今回も無事に完結いたしました。

これも最後まで読んでくださった皆様のおかげでございます。本当にありがとうございます。

これ以降は作者の自己満足、もとい作品に対する思い入れや考えを語っていきたいと思います。

読まずとも、本作には全く影響ないので、興味ない、とおっしゃる方はすぐさま回れ右することをお勧めします。

さて。さっそく語っていききたいと思います。

今作は6番目と似た雰囲気だなー、と思いながら書いていました。作品の中で、物語を考える。簡単なようで難しい作業です。

しかし、今回ははつきり言って適当に作りましたけどね。

成瀬が言っていました、クオリティがとてつもなく低かったですね……

でも、それでもいいや、と思って書いていたので、OKです。

みなさんの学校では七不思議あったんですかね？

私は七不思議なんてものは皆無でした。あったのかもしれませんが、私の耳には届きませんでしたね……。

で、今回話を引っ張ってくれた戸塚結衣さんですが。

一応、『彼女を話の中心にしてほしい』というメッセージをもらったので、

案外面白いかも、という感じでやっていました。

成瀬と全くしゃべれなかった戸塚さんが、

徐々に話せるようになっていく、距離が近づいていく様を描きたかったのですが、うまくできませんでしたでしょうか。

いささか不安は残ってしまいましたが、

私は意外にいいコンビなのかも、と思いました。

オチについて、ですが、

『七不思議なのに話が八つある』というものが一番最初に思いつきました。

その後、三分の二の話が思いつき、

あとがき部分の話が思いつきました。

初めての試みでしたが、どうでしたか？

何となく本編には載せたくなくて、

後日談とか別視点とかそんな雰囲気の話にしたかったわけです。

深い理由はありません。

いらっ　ときた方がいましたら、申し訳ありませんでした。

最後に今後の話ですが、

少し間が空いてしまうかもしれませんが。

というか、間違いなく空きます。

例の『原作者になろう』に出そうと思っていたり、

このシリーズ以外の話を書こうと思ったり、

私生活でいろいろ忙しくなったり。

いずれにしても続きは書きます。しかし、いつになるか分かりません。

もし覚えていましたら、次回作もよろしくお願いいたします。

余談ですが、成瀬君たちも、もうすぐ三年生ですね……。

あとがき（後書き）

最後までありがとうございました。
またお会いできることを楽しみにしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8793s/>

偶然という名の奇跡10～文化祭の七不思議～

2011年7月11日12時49分発行